

豊岡市

# 広峰遺跡

— 一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和 6 (2024) 年 3 月

兵庫県教育委員会



豊岡市

# 広峰遺跡

一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和 6 (2024) 年 3 月

兵庫県教育委員会





調査区遠景（北西から）



貼石墓（SX01）全景（南から）



貼石墓 (SX01) 出土土器



広峰遺跡出土灯明皿

## 例 言

- 1 本書は、豊岡市上佐野に所在する広峰遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道 483 号豊岡道路工事に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移  
(発掘作業)  
確認調査 令和元年 9 月 9 日～令和元年 11 月 20 日  
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
本発掘調査 令和 2 年 11 月 9 日～令和 3 年 1 月 8 日  
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
工事請負：株式会社巴建設  
(出土品整理作業)  
令和 4 年 4 月 1 日～令和 5 年 3 月 17 日  
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
令和 5 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 15 日  
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部河合たみの補助のもと、園原悠斗・大嶋昭海が担当した。
- 5 本調査で出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。遺物写真撮影は、株式会社地域文化財研究所に委託して実施した。
- 6 空中写真測量は、株式会社ウエスコに委託して実施した。
- 7 調査成果の測量は電子基準点（香住・久美浜・兵庫日高）を基に基準点を設置して実施した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第 V 系に属する。本書で使用した方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 8 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の機関及び方々からの御指導・御教示をいただいた。記して感謝する次第である。  
豊岡市教育委員会・豊岡市立歴史博物館「但馬国府・国分寺館」  
稲本悠一・垣内拓郎・小寺 誠・狭川真一・仲田周平・西口圭介（敬略称）

## 凡 例

- 1 遺物には通し番号を付している。ただし鉄製品、石製品にはその頭にそれぞれM、Sをつけて土器類と区別している。
- 2 土器類の実測図は種類ごとに以下の様に断面の表現を区別している。  
須恵器：黒塗り / 土師器：白抜き
- 3 土器の赤彩は赤色で表現している。
- 4 遺構の名称は調査時に以下のような遺構の種類を示す記号を表記して、それぞれに通し番号を付した。 SX：貼石墓 SK：土杭 SP：小穴
- 5 遺構に被熱が確認された部分については赤色で表現している。



## 本文目次

第1章	遺跡の位置と環境	1
	第1節 地理・地形的環境	
	第2節 歴史的環境	
第2章	調査の概要	7
	第1節 調査に至る経緯	
	第2節 分布調査・確認調査	
	第3節 本発掘調査	
	第4節 整理作業	
第3章	調査の成果	12
	第1節 概要と基本層序	
	第2節 貼石墓 (SX01)	
	第3節 その他の遺構	
第4章	総括	26
	第1節 貼石墓 (SX01) の構築復元	
	第2節 広峰遺跡から出土する灯明皿	
	第3節 総括	

## 巻頭図版目次

### 巻頭図版 1

- 調査区遠景 (北西から)
- 貼付墓 (SX01) 全景 (南西から)

### 巻頭図版 2

- 貼石墓 (SX01) 出土土器
- 広峰遺跡出土灯明皿

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第10図	貼石墓 (SX01) 検出状況 (転落石あり)	13
第2図	広峰遺跡周辺の地質	2			
第3図	主要周辺遺跡	4	第11図	貼石墓 (SX01)	14
第4図	工事計画と広峰遺跡の位置	7	第12図	貼石墓 (SX01) 主体部	15
第5図	人力掘削	9	第13図	貼石墓 (SX01) 出土の土器	16
第6図	検出作業	9	第14図	SK01	17
第7図	調査前現況	10	第15図	SK02	18
第8図	調査区平面図	11	第16図	SK03	19
第9図	調査区断面図	12	第17図	SK04	19

第18図 SK05	20	第22図 遺構検出面直上出土の土器	22
第19図 SP01 出土の土器	21	第23図 遺構検出面直上出土の石製品	24
第20図 SP01	21	第24図 遺構検出面直上出土の鉄製品	25
第21図 SP02	21		

## 表 目 次

第1表 石製品・鉄製品観察表	25	第2表 土器観察表	28. 29
----------------	----	-----------	--------

## 写 真 図 版 目 次

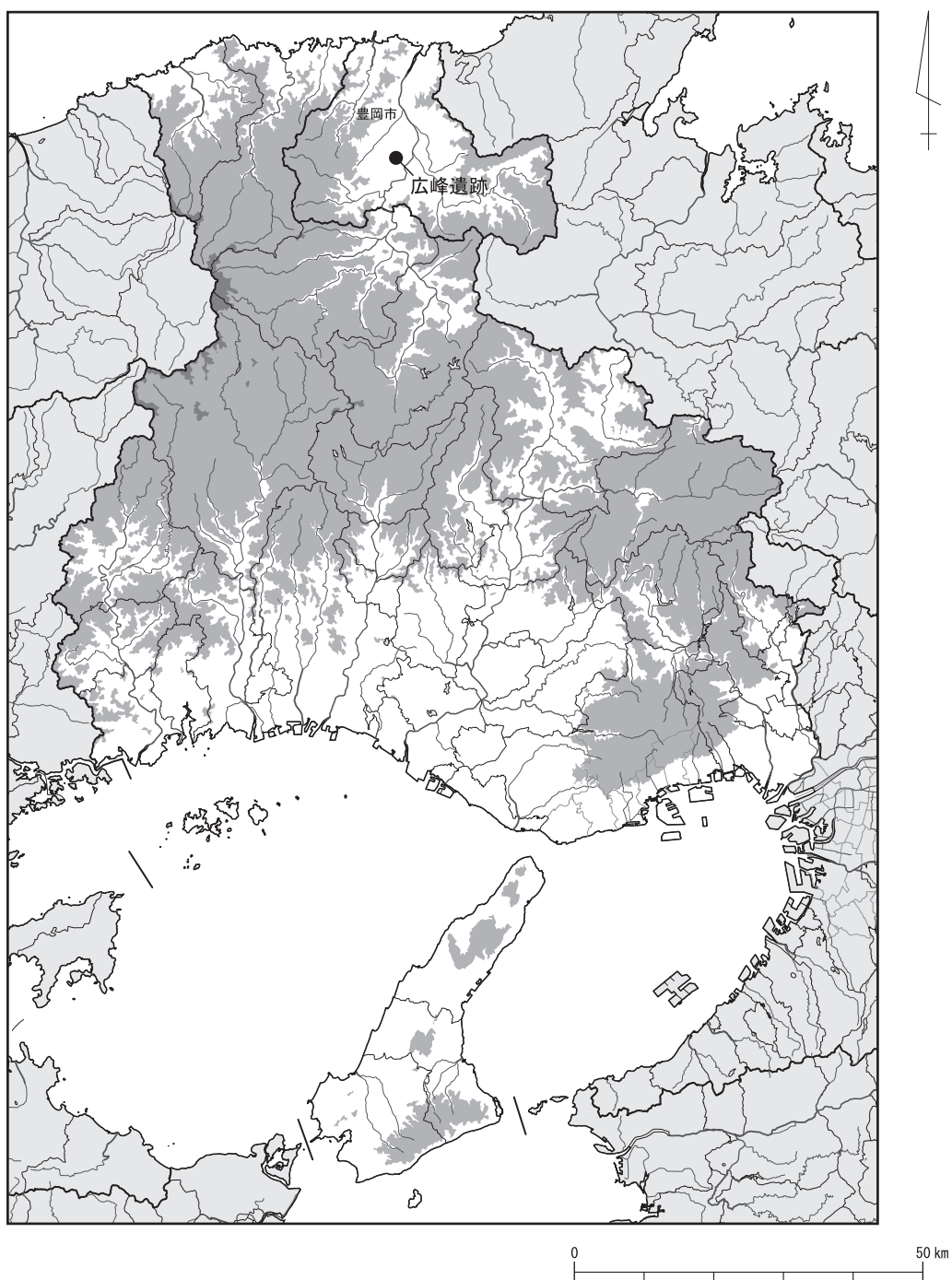
写真図版 1		写真図版 10	
調査前遠景（西から）		貼石墓（SX01）四隅立石検出状況（南東から）	
調査前遠景（北から）		四隅立石（北西から）	
写真図版 2		四隅立石（北東から）	
調査前遠景（北西から）		四隅立石（南西から）	
調査後遠景（北西から）		四隅立石（南東から）	
写真図版 3		写真図版 11	
調査後遠景（南から）		貼石墓（SX01）埋葬施設落ち込み（西から）	
調査後遠景（南西から）		貼石墓（SX01）埋葬施設横断面（南から）	
写真図版 4		写真図版 12	
調査区垂直写真（上が北）		SK01 検出状況（南から）	
貼石墓（SX01）垂直写真		SK01 壁体被熱部（東から）	
写真図版 5		SK01 横断面（南から）	
調査前状況（北から）		写真図版 13	
調査前状況（北東から）		SK02 横断面（北西から）	
貼石墓周辺（SX01）の調査前状況（南から）		SK03 横断面（北西から）	
写真図版 6		SK04 横断面（西から）	
貼石墓（SX01）検出風景（南から）		SK05 横断面（北西から）	
貼石墓（SX01）検出状況遠景（転落石あり）南から		SP01 土器出土状況（南から）	
写真図版 7		SP01 根石出土状況（南から）	
貼石墓（SX01）検出状況近景（転落石あり）南から		SP01 横断面（南から）	
貼石墓（SX01）検出状況（転落石あり）東から		SP02 横断面（南東から）	
写真図版 8		写真図版 14	
貼石墓（SX01）全景（南から）		出土土器 1	
貼石墓（SX01）全景（東から）		写真図版 15	
写真図版 9		出土土器 2	
貼石墓（SX01）全景（西から）		写真図版 16	
貼石墓（SX01）石敷設状況 1（南から）		出土土器 3	
貼石墓（SX01）石敷設状況 2（南西から）		写真図版 17	
貼石墓（SX01）石敷設状況 3（北西から）		出土土器 4・石製品 1	
貼石墓（SX01）石敷設状況 4（南から）		写真図版 18	
		石製品 2・鉄製品	

# 第1章 遺跡の位置と環境

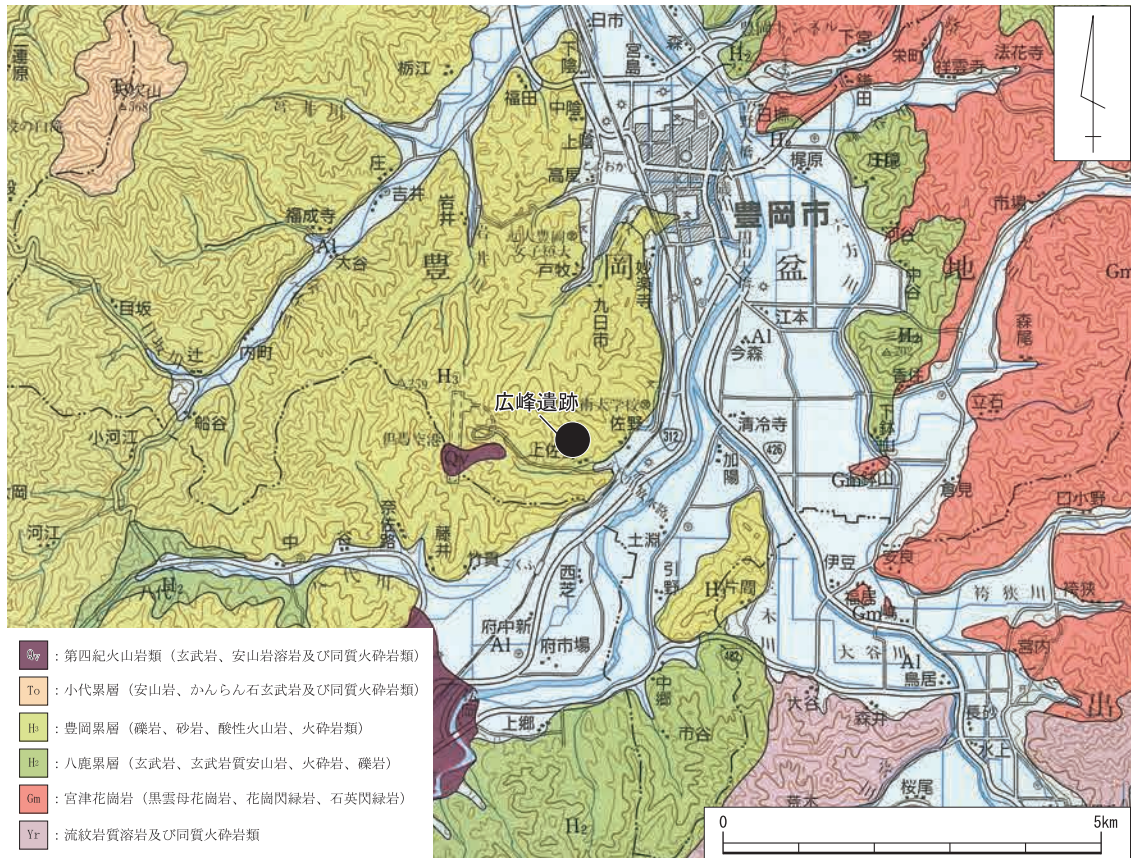
## 第1節 地理・地形的環境

### 1. 広峰遺跡の地理

広峰遺跡は兵庫県豊岡市上佐野に所在する（第1図）。豊岡市は、平成17(2005)年の「平成の大合併」により旧豊岡市・出石郡出石町・同郡但東町・城崎郡日高町・同郡竹野町が合併してつぐられ、その面積は 607.66 km<sup>2</sup>と県下最大規模をほこる。豊岡市は北を日本海に面しており、西



第1図 遺跡の位置



第2図 広峰遺跡周辺の地質

は美方郡香美町、南は養父市、東は京都府京丹後市にそれぞれ面している。市域の多くは中国山地の東端に位置する標高 500m 以上の山塊が占めており、面積に対する人口は少ない（令和 4 年現在人口約 78,000 人）。この山塊の谷間を縫うように河川がはしり、最後には円山川に合流して日本海へそそがれる。

豊岡市は兵庫県北部地域の中核的な街であり、但馬コウノトリ空港を空の窓口としている。道路網は、兵庫北部の東西を結ぶ国道 178 号線や、南北交通の中心である北近畿豊岡道路（現在延伸工事中）などが通っている。公共交通機関についても、J R 山陰本線やそこから派生する北近畿タンゴ鉄道宮津線など、主要観光地へのアクセスは良好であると言える。

## 2. 広峰遺跡の地形（第 2 図）

広峰遺跡の所在する豊岡市は兵庫県北部に位置し、地形大別としては三日月状の盆地と山地に分けられる。三日月状の盆地は豊岡盆地と呼ばれ、約 6000 年前まで続いた温暖化による海面上昇に伴って形成された古豊岡湾に、円山川によって運ばれた土砂が堆積した沖積層で形成されている。この沖積層は厚く、現在の豊岡市中心部付近で 40～50m、河口部で 60m 以上に及ぶ。その堆積は上層が締まりの緩い砂質土層、その下部に軟弱な粘性土層が堆積しており、安定土壌とは言い難い。この豊岡盆地の中心を流れる一級河川の円山川は、朝来市生野町円山を端として日本海側へと流れる。円山川の延長は約 67km を測り、途中いくつもの小河川に分流する。豊岡盆地の両側に広がる山地は北丹層群（円山川左岸）と山陰帯花崗岩類（円山川右岸）を基盤とする山塊

である。豊岡盆地周辺の山地は、標高 300～600m の豊岡累層と八鹿累層によって形成されている。広峰遺跡の所在する周辺は豊岡累層が基盤であり、礫岩・砂岩・酸性火山岩・火砕岩類で構成されている。この山地は、盆地側にいくつもの開析谷が形成されており、広峰遺跡もこの開析谷の一つに面している。広峰遺跡の面した谷は円山川左岸に東西方向に開けており、谷奥までの距離は約 2 km である。この谷の北側の山塊に形成された、舌状の尾根に広峰遺跡は位置する。

## 第 2 節 歴史的環境

### 1. はじめに

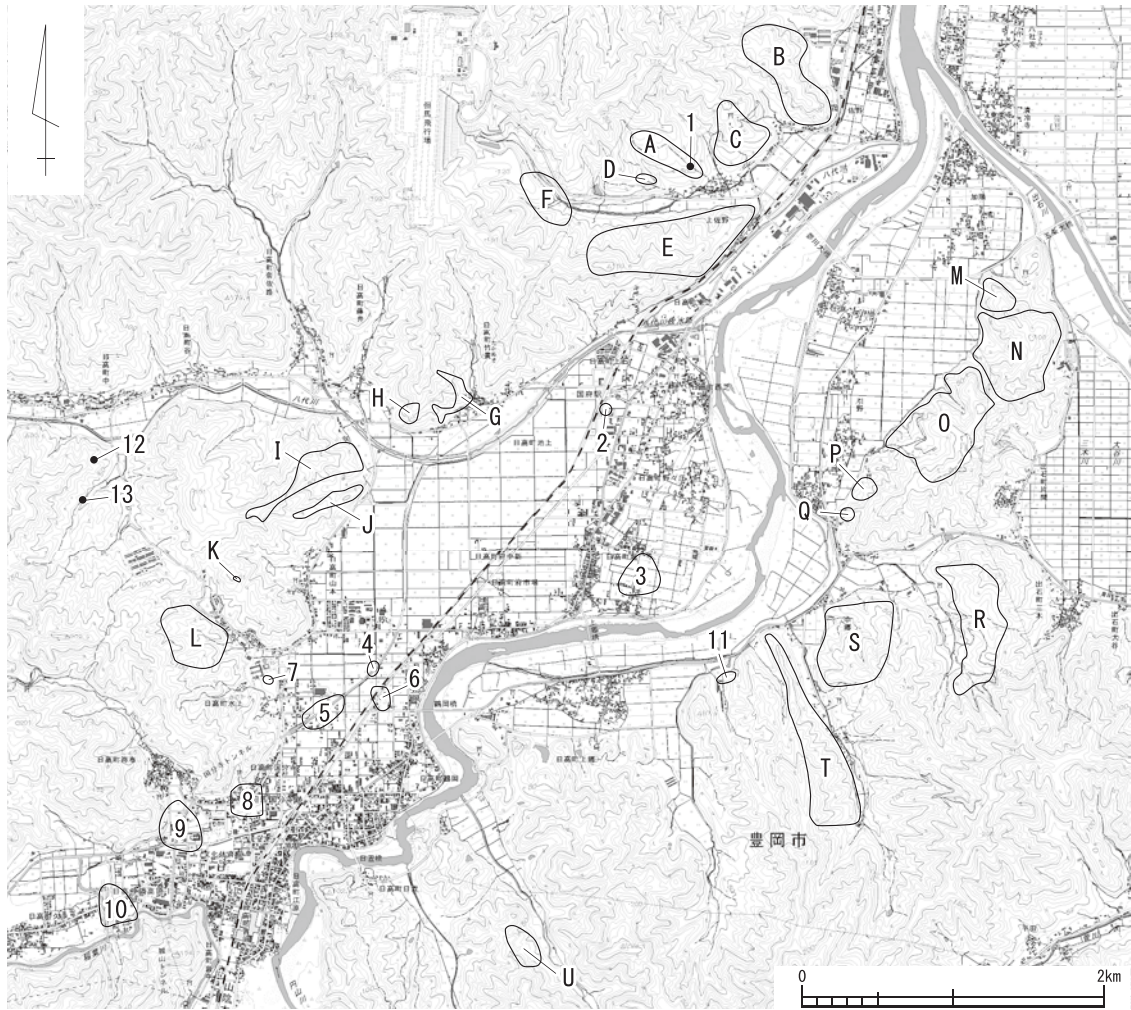
当節では、広峰遺跡が所在する円山川流域（国府平野）とその周辺を囲む山々の遺跡を中心に、歴史的環境を概観する。概観する時代は、主に但馬国府造営以前の古墳時代～飛鳥時代と、広峰遺跡の時期に関連する奈良時代～平安時代を取り上げる。概観の際は、基本的に発掘調査が行われた遺跡を扱う。なお、第 3 図と文章中の遺跡に付した番号は全て対応する。

### 2. 主要周辺遺跡

#### (1) 古墳時代～飛鳥時代

円山川流域の山々には、非常に多くの古墳が造営されている。これらの古墳は尾根筋に列を成して造られており、古墳群としてのまとまりが見られる。一方でその多くは踏査による発見に留まり、発掘調査が実施された古墳は少ない。

広峰遺跡においても、埋蔵文化財包蔵地の観点では、広峰古墳群（A）に内包されており、包蔵地内にはいくつかの古墳状の高まりがみられる。その周囲には勝妙寺谷古墳群（B）や雷神社古墳群（C）、長尾谷古墳群（D）、ホーキ古墳群（E）、上佐野古墳群（F）などが山塊の各尾根筋を利用して造られている。一般国道 483 号豊岡道路に伴う発掘調査においても、いくつかの古墳群の様相が明らかになっている。ホーキ古墳群（E）に属する上佐野 1 号墳（E）は、竪穴系横口式石槨をもつ円墳である。石室内のみならず、開口部や周溝より須恵器や土師器が出土し、鏝付鉄刀や直刀、鉄鏃、刀子、銅製耳環、土製丸玉が副葬品として納められている。出土土器から初葬が 6 世紀第 4 四半期、追葬が 7 世紀第 3 四半期～第 4 四半期とされている。竪穴系横口式石槨は 6 世紀前半（TK10 併行）頃から円山川流域で多く見られる埋葬形態であり、上佐野 1 号墳の周辺では円山川を挟んで東側の丘陵に位置する大師山古墳群（O）においても一定量見られる。竹貫古墳群（G）では、2 基の調査が実施されている（竹貫 23・24 号墳）。竹貫 23 号墳は竪穴式石槨と木棺直葬をもつ円墳、24 号墳は竪穴式石槨をもつ円墳であり、副葬品として須恵器や土師器、鉄刀、刀子が納められている。時期は中期末（5 世紀後半）である。また、付近には鎌倉時代～南北朝時代にかけての中世墓（竹貫 1 号墓・2 号墓）が見ついている。藤井古墳群（H）では、1 基の調査が実施されている（藤井 1 号墳）。藤井 1 号墳は竪穴式石槨と木棺直葬をもつ長方形墳である。主体部からは、副葬品として須恵器や鉄刀、碧玉製勾玉、管玉、ガラス小玉が出土している。時期は 6 世紀前半～中葉である。なお同一尾根上には、弥生時代後期前葉～中葉の墳墓が 2 基見ついている。大木谷古墳群（I）では、中期～後期（4 世紀前半～6 世紀）にかけての古墳 18 基が検出されており、それぞれに複数の主体部が見られる。耳谷草山古墳群（J）では、前期～



番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代
1	広峰遺跡	102158	上佐野	奈良時代～平安時代
2	上石遺跡	611432	日高町上石	奈良時代～鎌倉時代
3	権現遺跡	611501	日高町府市場	平安時代
4	カナゲ田遺跡	610653	日高町松岡	平安時代
5	深田遺跡	100330	日高町水上	平安時代～鎌倉時代
6	川岸遺跡	611098	日高町松岡	平安時代
7	水上遺跡	610649	日高町水上	平安時代
8	但馬国分寺	610648	日高町国分寺	奈良時代～平安時代
9	祢布ヶ森遺跡	610646	日高町祢布	平安時代
10	南構遺跡・南構古墳群	610644	日高町祢布	縄文時代～室町時代
11	山谷遺跡	611248	日高町上郷	平安時代
12	宮の谷窯跡	610565	日高町八代	飛鳥時代
13	イチゴ谷窯跡	610566	日高町八代	飛鳥時代
A	広峰古墳群	102159・102692～102694	上佐野	古墳時代
B	勝妙寺谷古墳群	101858～101878・102162～102355	九日市上町	古墳時代
C	雷神社古墳群	102358～102419	佐野	古墳時代
D	長尾谷古墳群	102692～102694	上佐野	古墳時代
E	ホーキ古墳群・上佐野1号墳	102695～102793・102824～102891	上佐野	古墳時代
F	上佐野古墳群	102794～102821	上佐野	古墳時代
G	竹貫古墳群	611071～611091	日高町竹貫	古墳時代、鎌倉時代
H	藤井古墳群	610999～611007	日高町竹貫	古墳時代
I	大木谷古墳群	610441～610501	日高町山本	古墳時代
J	耳谷草山古墳群	610414～610440	日高町山本	古墳時代
K	西垣古墳群	610532～610534	日高町水上	古墳時代
L	尼ヶ宮古墳群	610549～610560・610670～610689	日高町水上	古墳時代
M	清水古墳群	102944～102965	加陽	古墳時代
N	草山古墳群	103242～103303	加陽	古墳時代
O	宮谷・大師山古墳群	103341～103506・103601～103689	引野	古墳時代
P	梅ヶ坂古墳群	103566～103573	引野	古墳時代
Q	須賀神社古墳群	103574～103576・104096	中郷	古墳時代
R	葦田神社・アイタチ古墳群	103845～103847・103849～103854・103862～103872	中郷	古墳時代
S	深谷古墳群	103692～103794	中郷	古墳時代
T	ホウキ古墳群	103795～103831・103873～103940	中郷	古墳時代
U	菖蒲谷古墳群	611197～611213	日高町鶴岡	古墳時代

第3図 主要周辺遺跡

中期後半にかけての 10 基の古墳（耳谷草山 14～24 号墳）と 2 基の土器棺墓が見つまっている。前期の古墳の主体部からは、土師器、青銅鏡、鉄刀、鉄剣、刀子、ヤリガンナが、中期前半の古墳の主体部からは、須恵器、青銅鏡、鉄刀、鉄鏃、刀子、鉄鎌、袋状鉄斧、ヤス状鉄器、石釧、勾玉、管玉、ガラス小玉、切子玉が、中期後半の古墳の主体部からは、鉄鏃、鉄鎌、U 字形鋤先がそれぞれ出土している。西垣古墳群（K）では、3 基調査が実施されている（西垣 1～3 号墳）。いずれも円墳であり、埋葬施設は箱式石棺や木棺直葬である。とりわけ西垣 1 号墳主体部 1・2 の箱式石棺には、全面に水銀朱が塗布されており、鉄剣やヤリガンナ、鉄鎌、鉄鏃、板状鉄斧、袋状鉄斧が副葬されている。時期は 1～3 号墳ともに前期中葉（4 世紀中頃）である。尼ヶ宮古墳群（L）では、中期前葉～後期前葉にかけての 15 基の古墳が調査されている。埋葬施設は竪穴式石槨や箱式石棺、木棺直葬と様々である。副葬品は須恵器や土師器、鉄刀、鉄鏃、刀子、鉄鎌が納められている。

## （2）奈良時代～平安時代

奈良時代～平安時代にかけての国府平野周辺は、但馬国府（祢布ヶ森遺跡）（9）と但馬国分寺（8）、国分尼寺（水上遺跡）（7）を中心に集落が展開される。よって国府平野南西端の日高町祢布とその周辺に調査事例が集中する。

上石遺跡（2）では、調査の結果、掘立柱建物跡 14 棟や井戸、土坑、溝などが見つまっている。遺物は須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、硯、羽口、椀形鉄滓、鉄器、石製品と豊富かつ多量に出土している。なかでも祭祀に関連する土器埋納土坑からは、24 個体もの赤色顔料が塗布された土師器皿が一括埋納されており、そのうちのヘラ切りの 12 個体には、底部に『猪主』と墨書されており、特異である。以上のような遺構や遺物の様相から、官衙に関連する集落であるという評価が可能である。上記の遺構と遺物の時期は、大きく 8 世紀後半、9 世紀代～10 世紀前半、11 世紀～12 世紀に分けられるが、とりわけ 8 世紀後半～10 世紀前半に盛期をもつ。川岸遺跡（6）では、調査の結果、板やしがらみによる護岸が施された幅 1.2～1.9m、深さ 20 cm 程度の溝 3 条が見つまっている。溝からは土師器、須恵器のほか、墨書土器や荷札状木製品、檜扇、斎串、人形、馬形が出土している。この溝は土器類の型式から 8 世紀末～9 世紀前半頃に埋没したと考えられる。溝から出土した遺物には、官衙の様相を示す墨書土器、荷札状木製品、檜扇や、祭祀的要素の強い斎串、人形、馬形が出土していることから、国府に関連する祓所である可能性が高い。深田遺跡（5）では、調査の結果、道路状遺構や井戸、土坑、溝などが見つまっている。道路状遺構には両側に溶岩礫を積んで道路際としており、この溶岩礫に挟まれた範囲には整地土を盛って道路を作り出している。また、東西の微高地に挟まれた沼地状凹地には、多量の木製品が出土している。この木製品には、題籤軸を含む木簡や、人形などが多く含まれる。題籤軸に記された墨書からは、田地や稲の管理にまつわるものや、「佐須郷」といった地名など官衙的要素がきわめて強く、その他の墨書土器なども踏まえると官衙のなかでも国府クラスであることは確実であると言える。その他の遺物としては、土師器、須恵器、円面硯、風字硯、製塩土器、馬形、斎串、檜扇、独楽、鉄製絞具、銅製巡方、銭貨、容器類、農具、工具、武器類など多岐にわたる。上記の遺構と遺物の時期は、概ね 8 世紀末～9 世紀前半であるが、一部 10 世紀代や 12 世紀～14 世紀にわたる遺物も見られる。深田遺跡から北東に 300m ほど、川岸遺跡から北に 150m ほど離れたカナゲ田遺跡（4）では、溝より量的にまとまって木製品が出土している。祭祀に関連する人形、馬形、斎串や、使用する階層が限定される算木や木履など特殊な遺物が多く、川岸遺跡と似た様

相を示している。時期についても、9世紀代と概ね一致する。南構遺跡・南構古墳群（10）では、弥生時代から中世にかけての遺構と遺物が見つまっている。兵庫県教育委員会による調査の主な遺構としては、古墳時代前期から終末期にかけての竪穴建物 21 棟や、古墳時代終末期～鎌倉時代にかけての掘立柱建物 143 棟、弥生時代後期の木棺墓 4 基、土坑、溝、ピットが多数検出されている。また遺構は検出されていないものの、縄文時代の遺構と遺物が包含層中より出土している。また南構古墳群では、古墳時代後期前葉～終末期にかけての石室 14 基が検出されている。これらの遺跡・古墳群の画期は古墳時代後期～終末期（6～7世紀：南構Ⅴ～Ⅵ期）と奈良時代～平安時代（8世紀後半～9世紀）の2時期にあり、豊岡盆地を代表する大規模遺跡であると言えよう。

以上の遺跡の他にも、奈良時代～平安時代前半にかけての墨書土器や円面硯が表採された山谷遺跡（11）や、平安時代の土師器、須恵器や和鏡が出土した権現遺跡（3）などが挙げられる。

#### 〔主要遺跡参考文献〕

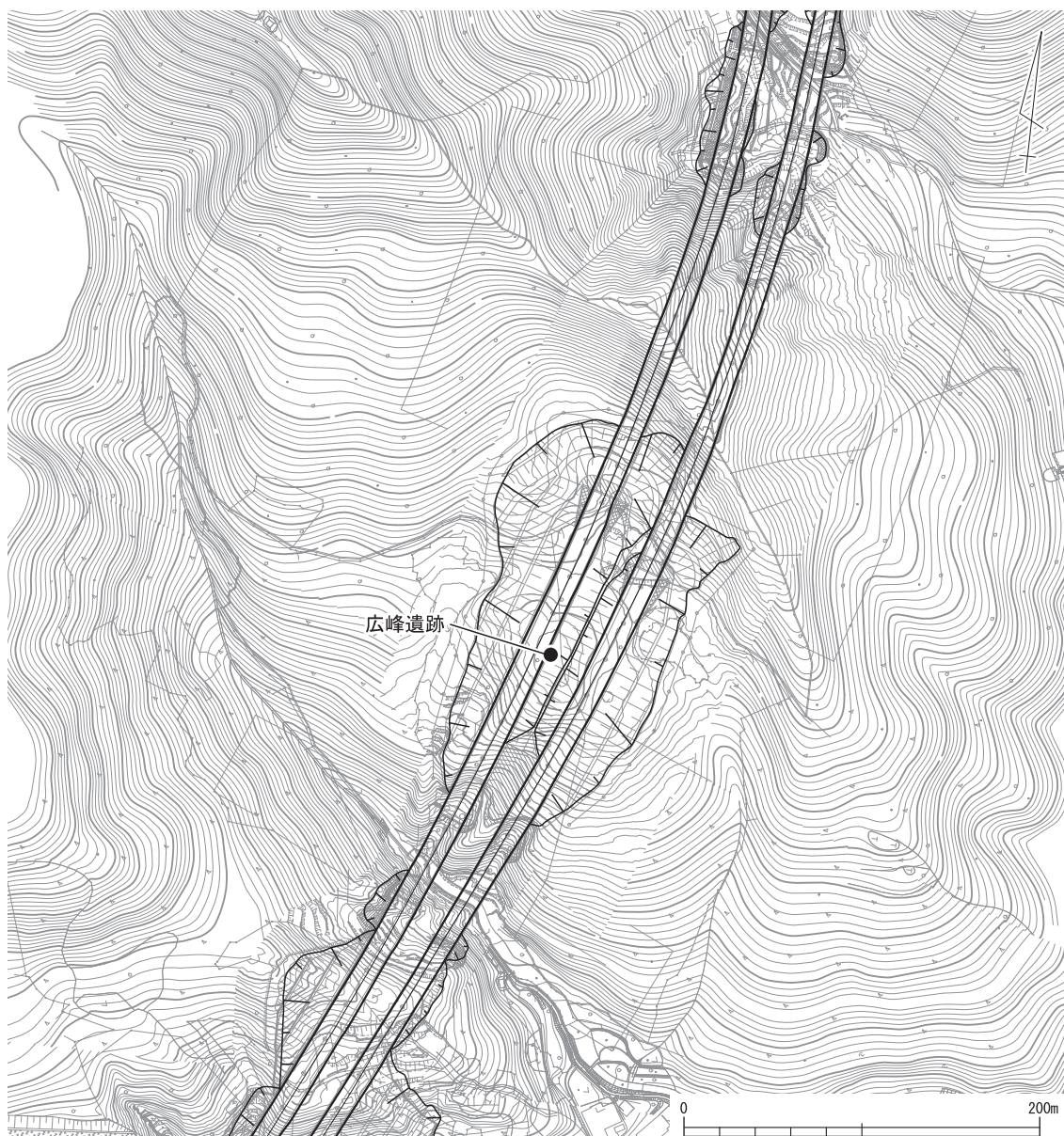
**藤井古墳群** 山田清朝編 2021『藤井古墳群』兵庫県教育委員会 **尼ヶ宮古墳群** 岸本一宏編 2019『尼ヶ宮古墳群』兵庫県教育委員会 **西垣古墳群** 久保弘幸・鐵 英記・菱田淳子編 2018『西垣古墳群・岩谷古墳群』兵庫県教育委員会 **深田遺跡** 吉織雅仁編 1991『深田遺跡・カナゲ田遺跡』兵庫県教育委員会 **カナゲ田遺跡** 吉織雅仁編 1991『深田遺跡・カナゲ田遺跡』兵庫県教育委員会 **川岸遺跡** 加賀見省一編 1985『川岸遺跡』日高町教育委員会 **南構遺跡・南構古墳群** 仲田周平編 2017『小河江中黒窯跡・南構遺跡』豊岡市教育委員会・山田清朝編 2023『南構遺跡・南構古墳群』第一～四分冊 兵庫県教育委員会 **上佐野1号墳** 山田清朝編 2016『上佐野1号墳』兵庫県教育委員会 **大木谷古墳群** 兵庫県立考古博物館編 2018『平成29年度埋蔵文化財調査年報』  
**竹貫古墳群・竹貫中世墓** 兵庫県立考古博物館編 2019『平成30年度埋蔵文化財調査年報』 **耳谷草山古墳群** 兵庫県立考古博物館編 2019『平成30年度埋蔵文化財調査年報』 **上石遺跡** 渡辺昇編 2000『上石遺跡』兵庫県教育委員会 **祢布ヶ森遺跡** 前岡孝彰編 2012『祢布ヶ森遺跡第40・41次発掘調査報告書―第2次但馬国府跡の調査Ⅰ―』豊岡市教育委員会・仲田周平編 2020『祢布ヶ森遺跡第42次発掘調査報告書―第2次但馬国府跡の調査Ⅱ―』豊岡市教育委員会 **但馬国分寺跡** 櫃本誠一編 1973『但馬国分寺跡Ⅰ 昭和48年度調査概報』兵庫県教育委員会・日高町教育委員会 2002『但馬国府と但馬国分寺 発掘調査からその謎に迫る』・仲田周平編 2021「史跡但馬国分寺跡の調査―但馬国分寺跡第38次調査成果―」『令和3年度 兵庫県埋蔵文化財調査成果連絡会（資料）』 **大師山古墳群** 潮崎 誠編 1986「豊岡市引野・大師山古墳群発掘調査概要」『豊岡市文化財調査概報集 1985年度』豊岡市教育委員会・潮崎 誠編 1987「特異な構造の石室群―大師山古墳群の調査から―」『歴史と神戸』144 神戸史学会



## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所は、豊岡市上佐野において一般国道483号豊岡道路事業を計画しており、対象範囲は極めて長距離に及ぶ。この事業対象範囲には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多く含まれている。本報告はそのうちの広峰1号墳（遺跡番号：102158）として周知されている範囲を対象とする。なお調査の結果、当包蔵地内で検出された遺構は古墳時代に帰属せず、奈良時代～平安時代に帰属することが判明した。よって豊岡市教育委員会と協議をおこない、遺跡名を「広峰遺跡」へと変更した。



第4図 工事計画と広峰遺跡の位置

## 第2節 分布調査・確認調査

一般国道483号豊岡道路建設に先立ち、当地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡名：広峰遺跡〔旧：広峰1号墳〕、遺跡番号：102158）であることから、分布調査および確認調査を実施した。

### 分布調査

遺跡調査番号 2018035

調査地 豊岡市上佐野 他

調査期間 平成30年8月7日

調査面積 23,000 m<sup>2</sup>

調査体制 調査員 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課 中川渉・上田健太郎・渡瀬健太

調査結果 踏査により地形観察および地表面の遺構・遺物分布の有無の調査を行った。その結果、平坦面および墳丘状の高まりが複数個所にわたり見つかった。

### 確認調査

遺跡調査番号 2019120

調査地 豊岡市上佐野 他

調査期間 令和元年9月9日～令和元年11月20日

調査面積 108 m<sup>2</sup>

調査体制 調査員 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部  
垣内拓郎・松崎光伸

調査結果 No.156 地点、No.157 地点、No.161 地点の3地点に30箇所のトレンチを設定した。本報告に関連する5箇所のトレンチでは、集石遺構や土坑などごく少量であるが遺構および遺物が見つかった。集石遺構は丘陵頂部に位置しており、古代～中世にかけての経塚あるいは墓の可能性が考えられた。なお、残りの25箇所のトレンチでは、明確な遺構および遺物は確認されなかった。

## 第3節 本発掘調査

前節における確認調査によって、埋蔵文化財の遺存が明らかとなった。よって令和2年度に本発掘調査を実施した（第5・6図）。

### 本発掘調査

遺跡調査番号 2020005

調査地 豊岡市上佐野

調査期間 令和2年11月9日～令和3年1月8日

調査面積 986 m<sup>2</sup>

調査体制 調査員 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部  
園原悠斗・松崎光伸

調査結果 奈良時代から平安時代にかけての墳丘墓を検出した。墳丘墓は、葺石状に石を配石しており、貼石墓と呼称できる。主体部は遺存しているものの、盗掘を受けており掘方は大幅に改変されている。遺物は集石の隙間や検出面直上より須恵器や土師器、石製品、鉄製品が出土した。



第5図 人力掘削



第6図 検出作業

## 第4節 整理作業

整理作業は、令和4年度～令和5年度の2箇年にわたり実施された。ただし、出土土器の水洗作業については、発掘調査と並行して現場事務所にて実施した。各年度の整理体制は以下の通りである。

令和4年度

整理期間 令和4年4月1日～令和5年3月17日

整理体制 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 深江英憲・大嶋昭海・野田優人・西口圭介

調査第2課 園原悠斗

整理技術員 栗山美奈・藤尾裕子・藤田久範（ネーミング）

岡崎眞子・小野潤子・石原香苗・梶原奈津子・亀井彩菜・香山玲子・小林礼子

新山王綾子・菅生真理子・富永愛子・森松沙耶香（接合・補強・復元）

河合たみ（実測・トレース）

大前篤子・桂 昭子・堀ノ内恵利・和氣坂綾子（保存処理）

整理概要 出土土器のネーミング・接合・補強・復元・実測、金属器保存処理・実測、遺構図の図面補正・トレース・レイアウト、原稿執筆を行った。

令和5年度

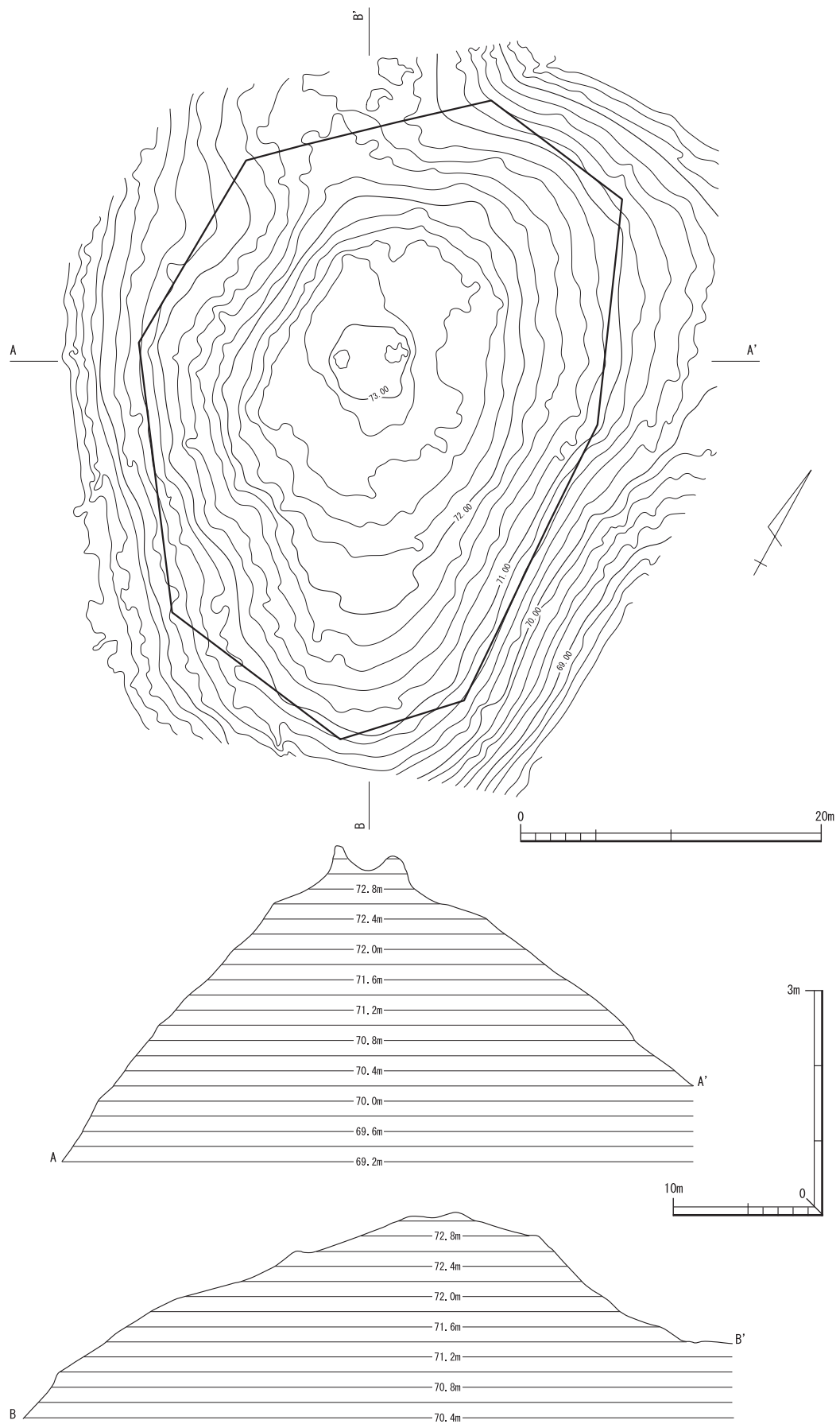
整理期間 令和5年4月1日～令和6年3月15日

整理体制 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

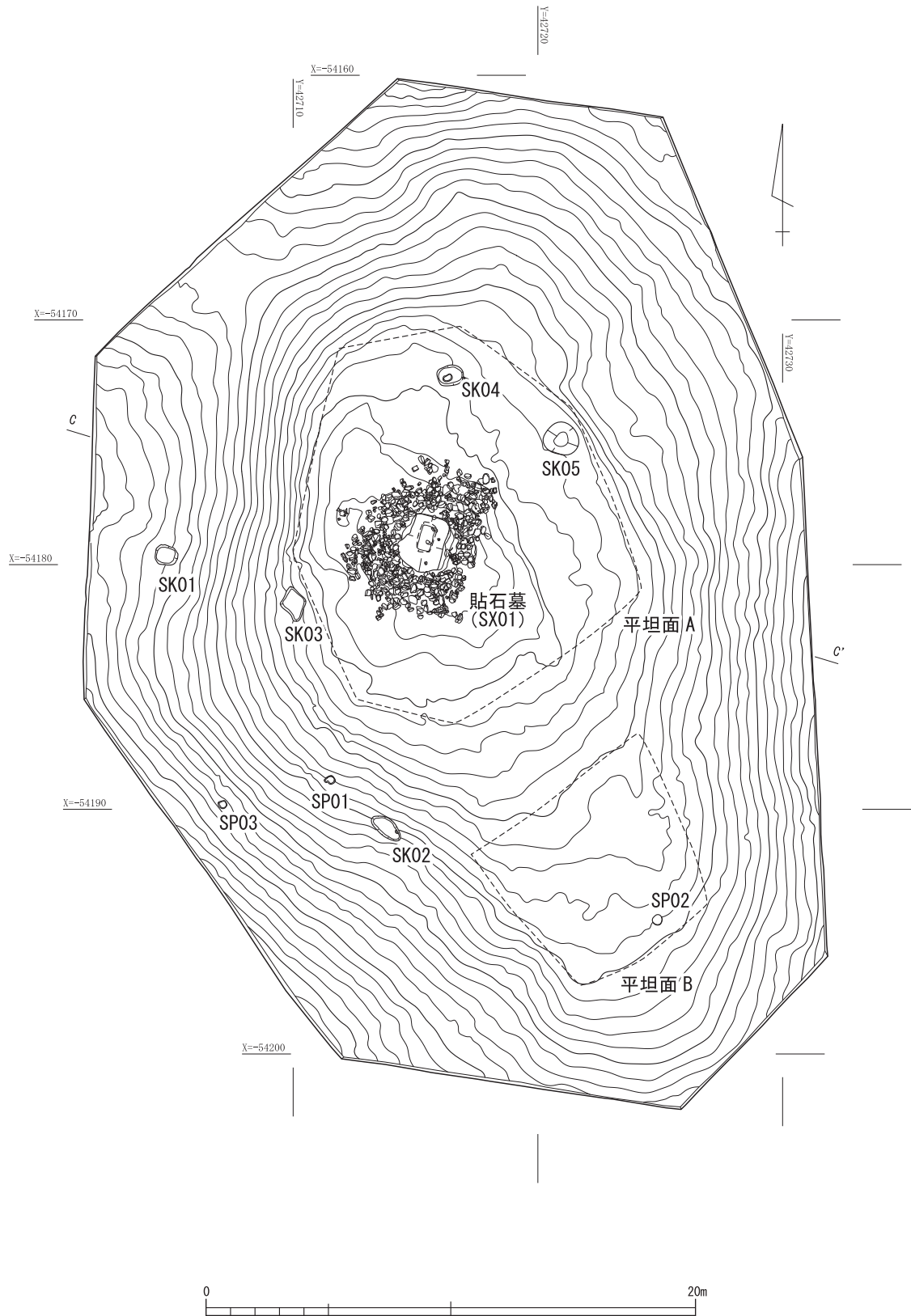
整理保存課 深江英憲・大嶋昭海・野田優人・稲本悠一

整理技術員 河合たみ（レイアウト）

整理概要 写真撮影、レイアウト、編集作業を経て報告書を刊行した。



第7図 調査前現況

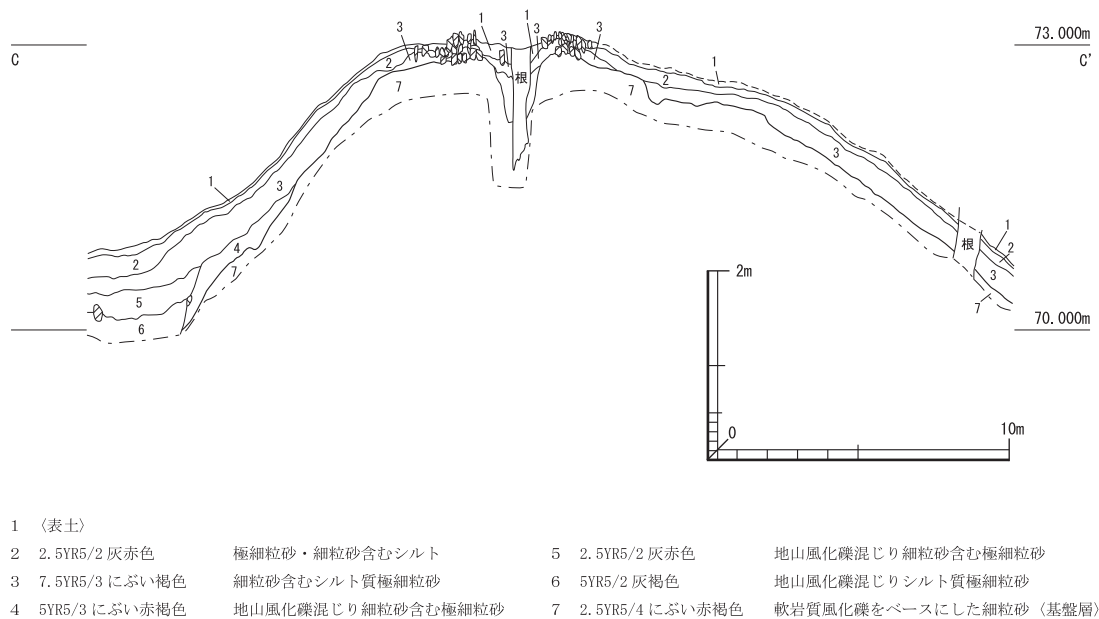


第8図 調査区平面図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 概要と基本層序

広峰遺跡は中国山地東端に位置する山塊から、東西方向に開けた開析谷に面した、標高 70m 前後の舌状の尾根筋に形成されている。今回の調査の結果、貼石墓 (SX01) を中心に土坑・ピットを検出した。遺跡の基本層序は丘陵上のため単純であり、表土下に自然堆積 2 層 (灰赤色細粒砂含む極細粒砂、にぶい褐色シルト質極細粒砂) を挟んだのち、基盤層が確認できる。基盤層は、北丹層群特有の軟岩質風化礫をベースとした細粒砂であり、この基盤層を掘り込んで遺構が作られている。



第9図 調査区断面図

### 第2節 貼石墓 (SX01)

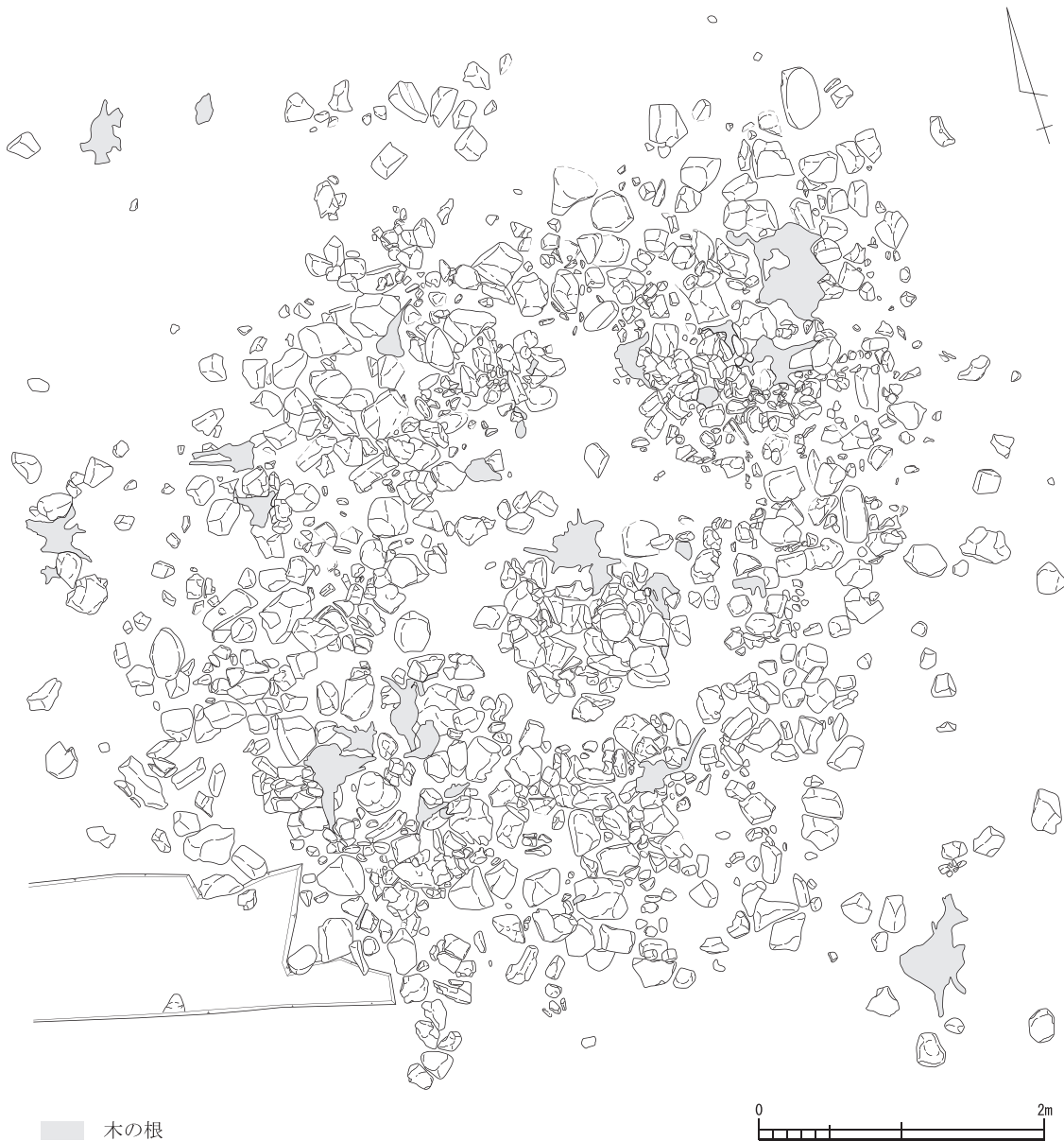
#### 1. 概要

調査区中央付近で検出した。当位置は広峰 1 号墳として、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていた場所である。確認調査の段階から石が路頭しマウンド状に盛り上がっており、古墳ないしは古墓であると予想されていた。遺跡の立地は、丘陵頂上に位置し、最高地点の標高は 73.10 m である。検出された遺構は、墳丘および主体部である。なお、後述するが主体部は後世の盗掘によって原型を留めていない。

#### 2. 墳丘

##### (1) 構造

貼石墓と呼称するように、墳丘の高まりに貼石状に石が積まれている。墳丘は盛土が確認できず、丘陵からの地山削り出しによって造り出されている。ただし、地山への明確なカット面も、裾部の傾斜変換点も見られず、極めて緩やかに削り出されている。削り出しは、2ヶ所の平坦面 (平坦面 A・B) を造り出したのち、平坦面 A に墳丘となる高まりを削り残している。貼石はこの墳丘に



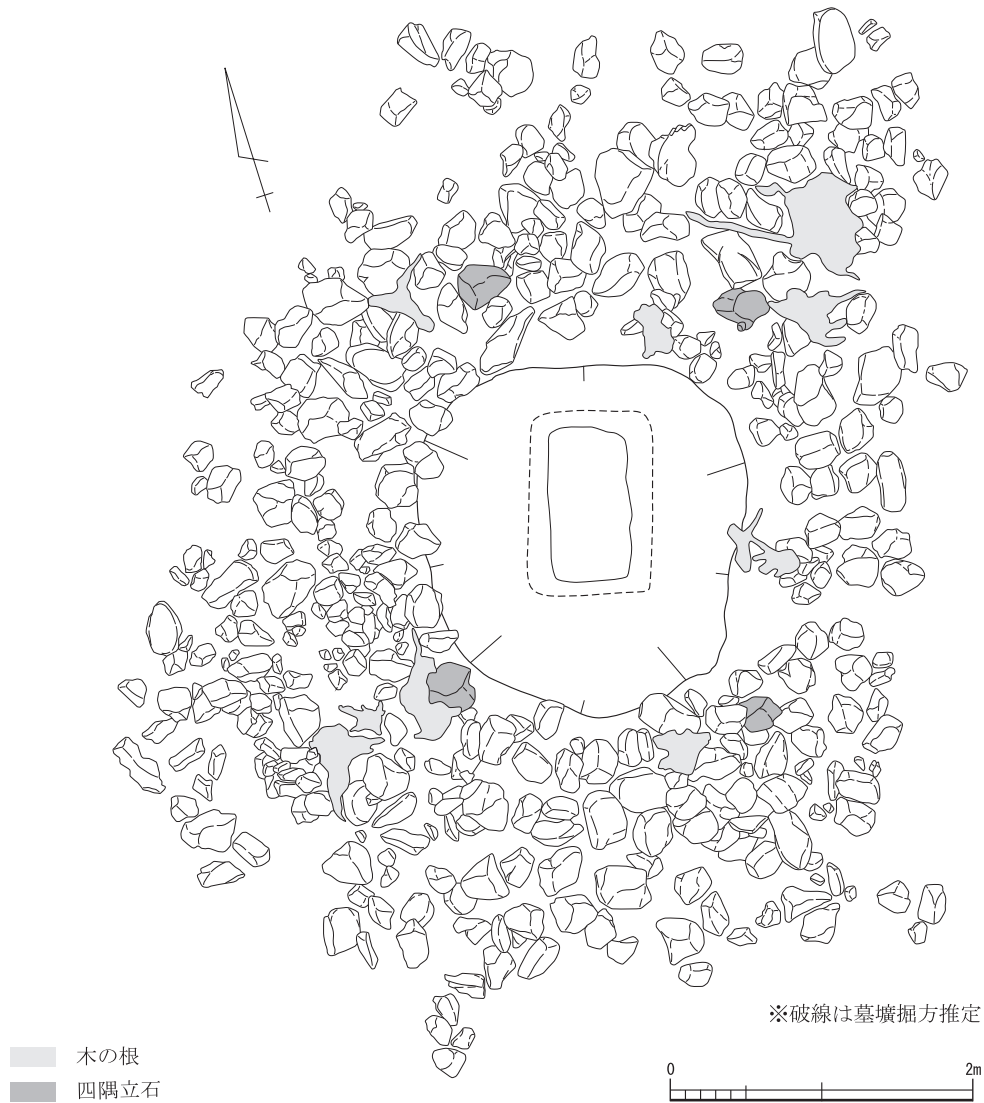
第 10 図 貼石墓 (SX01) 検出状況 (転落石あり)

積まれている。

(2) 形状・規模

平坦面 A は、丘陵の旧地形を反映させた形状であり、平面形は不整形である。その規模は、長軸 15m、それに直交する短軸は 12m である。平坦面 B も、平坦面 A と同様に旧地形を反映させた形状であり、平面形は不整形である。長軸 9 m、それに直交する短軸は 7 m である。これら A・B は、平坦面といっても、一定の傾斜を持っている。

平坦面 A に造られた墳丘は、上述のようにカット面や裾部傾斜変換点を持たず、極めて緩やかに造られているため、ここでは集石の範囲を基準に計測する。墳丘の平面形は、貼石の遺存状況から長方形志向である。その規模は長辺 6.3m、短辺 4.9m である。主軸方向は北北東である。墳丘の標高は、頂部で 73.10m、北側裾で 72.70m、西側裾で 72.80m、南側裾で 72.70m、東側裾で 72.85m である。これらの各裾部の標高は約 15cm 以内に収まっており、墳丘がほぼ水平であることを示す。



第 11 図 貼石墓 (SX01)

### (3) 貼石

墳丘検出段階において、石が重層的に重なり合い、人頭大の石材と拳大の礫が入り混じっていた。これらは層位的に表土や自然土壌層中に包含されていたため、原位置を保っていないと判断し、掘り下げを行った。その結果、遺構検出面直上にて原位置を保つ貼石を検出した。

貼石の遺存状況は、墳丘東・南部が良好である。一方で西から北側にかけては墳裾付近の遺存状況が良好ではない。貼石に使用されている石材は火山岩系の角礫から亜角礫である。石材は人頭大の物を使用する。古墳時代の葺石を連想するものの、裾部の基底石や区画列石といった構造は見られない。また、古墳時代終末期の畿内地域に見られる貼石をもつ古墳のように石の大きさを規格し、面を揃えて整然と並べるような状況でもない。石の貼り方は、比較的安定した長手面を底にする傾向にある。また、墳丘四隅には小口を底にして長手が直立する形で置かれているものが見られる。

なお、貼石内にいくつか直立する石を確認できた。直立する石は合計 4 石であり、その位置は長方形志向の墳丘の各隅部に位置する（以下、四隅立石）。ただし、古墳の基底石のように墳丘裾部に見られるわけではなく、裾部からの直線方向で約 1.0m 埋葬施設側に入る。貼石構築時の目印となる石か、もしくは祭祀的な意味合いを持つものか判然としないが、いずれにしても意図的なものであることは確実である。



### 3. 埋葬施設

#### (1) 概要

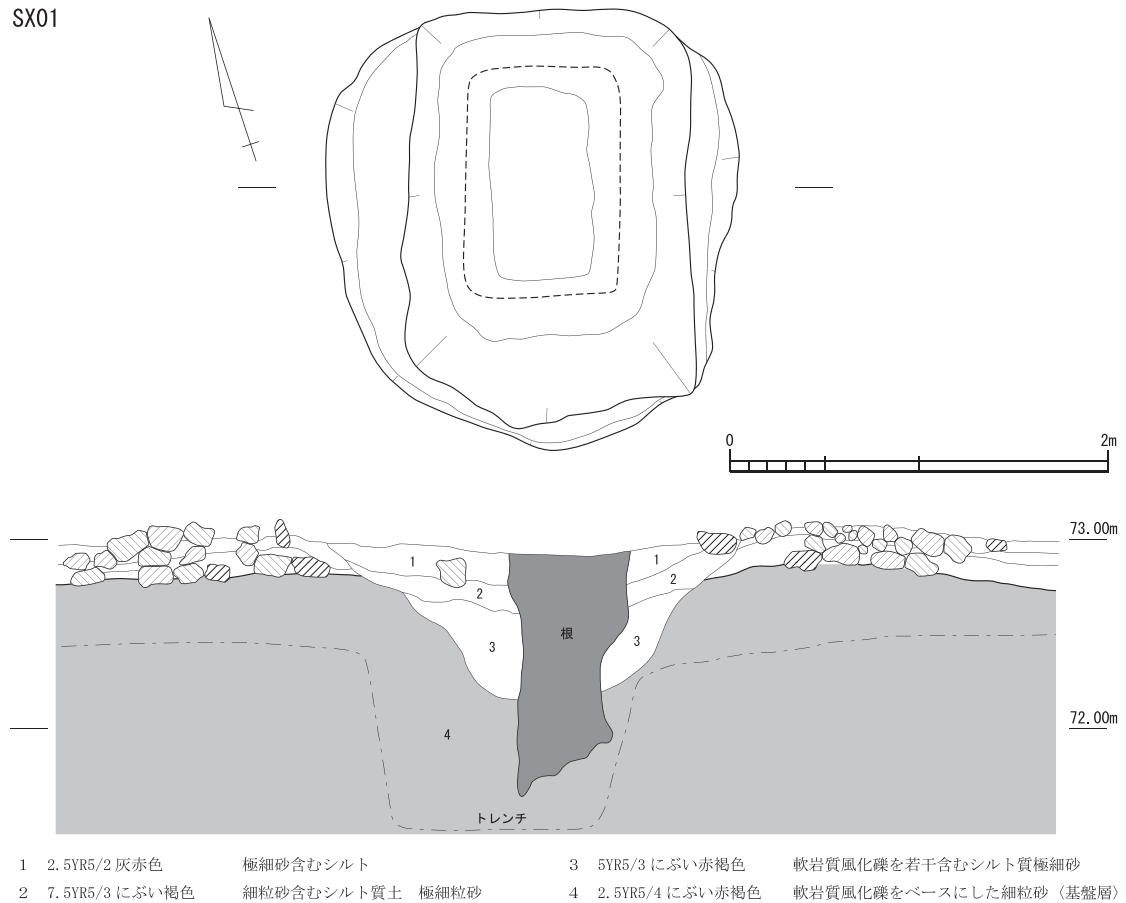
現地表面の段階から、墳丘状の盛り上がりの中央部には落ち込みが確認できており、埋葬施設の存在は当初から予想されていた。本発掘調査の結果、不定形土坑状の落ち込みが検出され、掘り方の形状や副葬品の有無から盗掘を受けた主体部であることが判明した。

#### (2) 形状・規模

貼石墓中央で検出した。検出した平面形状は不定形である。その規模は、長軸方向に 2.32m、それと直交する短軸方向に 2.19m を測る。深さは現地表面から 86 cm である。掘方は 2 段階に掘り分けられている。第 1 段階は現地表面から 25~30 cm の深さで掘削されている。掘方の形状は不定形で断面形状は緩やかな椀形を呈する。第 2 段階は第 1 段階の底面から 44~56 cm の深さで掘削されている。掘方の平面形状は隅丸の長方形で、南側はやや形状が乱れている。断面の形状は逆台形傾向である。第 1 段階底面から 14 cm 程度の位置で、やや掘方の傾斜を変換させている。

これらの遺構の状況を鑑みると純粋な主体部とは言い難く、盗掘を受けていると言える。また掘方の第 2 段階で長方形志向の掘り方になっていることから、この形状が本来の主体部形状であったと推測される。以上の観察から推定される主体部の平面形状は、北北東-南南西を主軸にもつ長方形で、その規模は長軸方向に約 1.2m、直交する短軸方向に約 0.8m を測る。また底面の規模は長軸方向に 1.02m、直交する短軸方向に約 0.54m を測る。

SX01



第 12 図 貼石墓 (SX01) 主体部

### (3) 副葬品

既に盗掘を受けており、埋葬施設内からの遺物の出土は見られなかった。

## 4. 出土遺物

埋葬施設内やその直上からの出土は無く、全て貼石上や石の隙間からの出土である。遺物は須恵器・土師器が出土した。時期は全て奈良時代後半（8世紀後半）である。

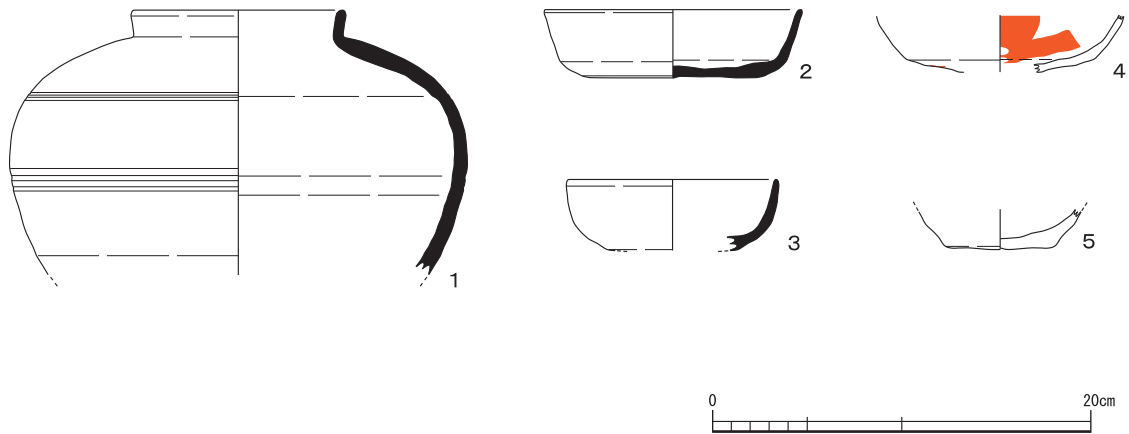
1は須恵器の壺Aである。口縁部は短く垂直よりやや外反気味にのび、端部は丸くおさめられている。胴部には、肩付近と最大径付近にそれぞれ2条の沈線が施文されている。内外面はともに回転ナデによって成形されている。口縁部から胴部上半にかけて、自然釉がみられる。

2は須恵器の杯Aである。体部内外面は回転ナデによって成形されており、底部は回転ヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。

3は須恵器の杯Aである。底部は欠損しているものの、口縁部の立ち上がりが強く碗形を呈する。口縁部から体部にかけては、内外面とも回転ナデによって成形されている。

4は土師器の杯Aである。器表は摩滅している。内外面ともに赤彩が施されている。体部内外面はユビナデによって成形されている。底部は摩滅が著しく調整不明である。底部は丸底気味の平底であり、口縁部への立ち上がりの強さを踏まえると、碗Cである可能性も考えられる。

5は土師器の杯Aである。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。



第13図 貼石墓（SX01）出土の土器

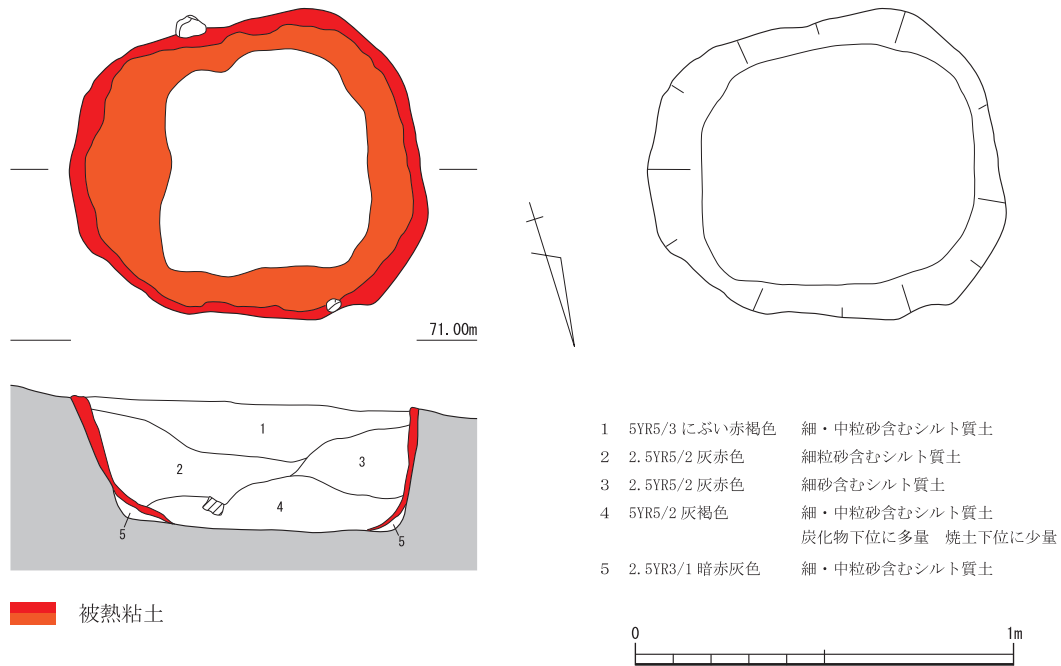
## 第3節 その他の遺構

### 1. 概要

土坑5基、小穴3基を検出した。土坑の平面形はいずれも不整円形である。遺物の出土は極めて少なく、人為的な遺構として判断し難いものが多い。小穴については、3基中、様相が明らかな2基を報告する。以下詳述を加える。

SK01 壁体被熱部検出状況

完掘状況



第 14 図 SK01

2. 土坑

SK01

**検出状況** 調査区西側で検出した。集石墓(SX01)およびSK03の西側に位置する。遺構の立地は、丘陵西側斜面から平坦部に移り変わった標高 70.80m地点である。頂上の貼石墓(SX01)からの距離は11m、比高差は約-2.3mである。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

**形状・規模** 検出面における平面形は、やや隅丸方形気味の楕円形をなす。ほぼ東西方向に主軸を持ち、その規模は長軸方向で0.95m、その直行方向で0.86mを測る。横断面形は逆台形である。検出面からの深さは0.35mである。

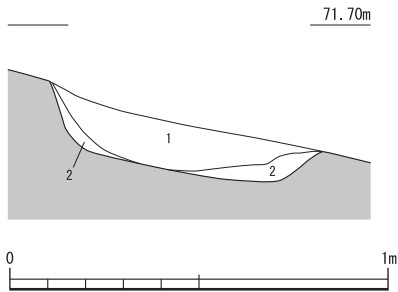
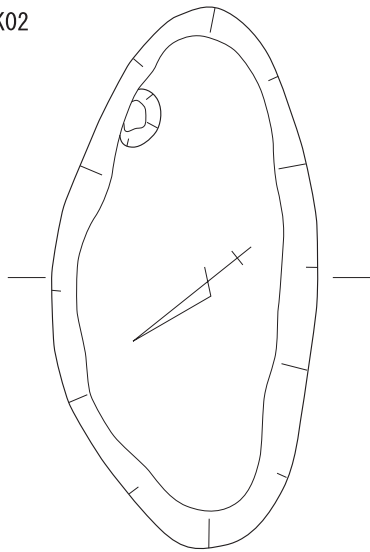
**被熱粘土壁検出状況** 土坑の壁には、厚さ3～5cmの被熱した粘土が貼り付いていた(以下、被熱粘土壁)。被熱粘土壁は土坑の壁全面に見受けられる。一方で床面では検出されていない。被熱粘土壁の胎土は、にぶい赤褐色のシルト質土に微細な軟岩質の風化礫が含まれており、地山由来であると言える。炭化物の出土は下層(4層)に多く、焼土も含む。これらの検出状況から、土坑は火葬場として利用されていたと推測される。

**埋没状況** 埋土は4層からなる。各層とも灰赤色系の色調であり、軟岩質の風化礫を含む。ただし、地山にみられる風化礫はφ～15cm程度であるのに対して、埋土の風化礫はφ～1cm程度である。各層とも炭化物を含み、とりわけ4層に多い。以上の層相から、各層とも人為的な埋め土であると考えられる。

**出土遺物** 埋土中および土坑底からは、遺物の出土は見られなかった。周辺の遺構検出面からは土師器坏(12)が出土している。

**時期** 出土遺物が無いため確定できないものの、埋土の様相や周辺から出土する遺物の時期を考慮して、奈良時代後半(8世紀後半)であると判断される。

SK02



- 1 2.5YR4/3 にぶい赤褐色 極細・細粒砂含むシルト質土  
0.1～0.5cm 大の炭化物・焼土少量
- 2 5YR5/4 にぶい赤褐色 細粒砂含むシルト質土

第 15 図 SK02

SK02

**検出状況** 調査区南側で検出した。貼石墓 (SX01) の南側、SP01の南東側に位置する。遺構の立地は、丘陵山頂から南側に張り出す尾根筋の南西側斜面上に位置する、標高 71.5m 地点である。頂上の集石墓からの距離は 12m、比高差は約-1.6m である。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

**形状・規模** 検出面における平面形は、楕円形である。北西-南東方向に主軸を持ち、その規模は長軸方向で 1.43m、その直行方向で 0.71m を測る。横断面形は逆台形傾向である。検出面からの深さは 0.13 cm である。

**埋没状況** 埋土は、にぶい赤褐色細粒砂・極細粒砂含むシルト質土と、にぶい赤褐色細粒砂含むシルト質土の 2 層からなる。層相から判断して、自然堆積であると考えられる。

**出土遺物** 埋土中および土坑底からは、遺物の出土は見られなかった。周辺の遺構検出面からは土師器坏 (8) が出土している。

**時期** 出土遺物が無いため確定できないものの、埋土の様相や周辺から出土する遺物の時期を考慮して、奈良時代後半 (8 世紀後半) であると判断される。

SK03

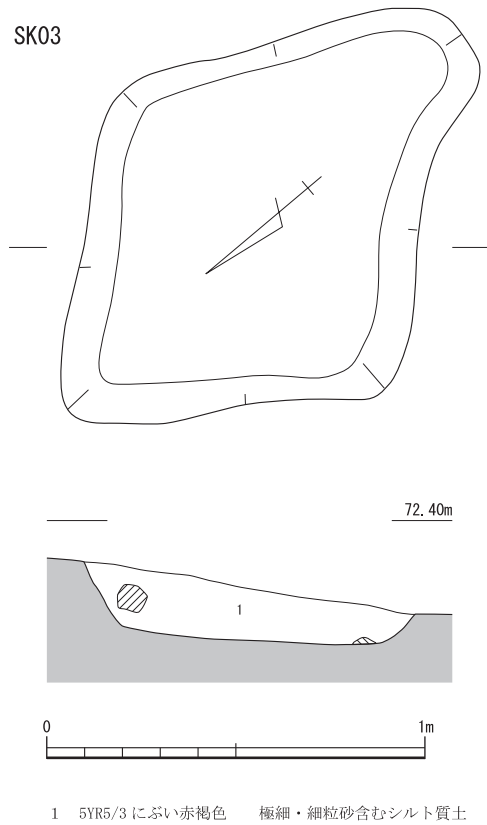
**検出状況** 調査区西側で検出した。貼石墓 (SX01) の南西側、SK01 の東側に位置する。遺構の立地は、丘陵西側の頂上にちかい緩やかな斜面上に位置する。標高 72.2m 地点である。頂上の集石墓からの距離は 6 m、比高差は-0.9m である。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

**形状・規模** 検出面における平面形は、不整形な隅丸長方形である。平面形に左右対称性はなく、主軸は判然としない。横断面形は逆台形傾向である。検出面からの深さは、丘陵頂上側で 0.16m、丘陵裾側で 0.11m である。そのため、土坑の底面は斜面の傾斜に対応せず、平坦に作り出している。

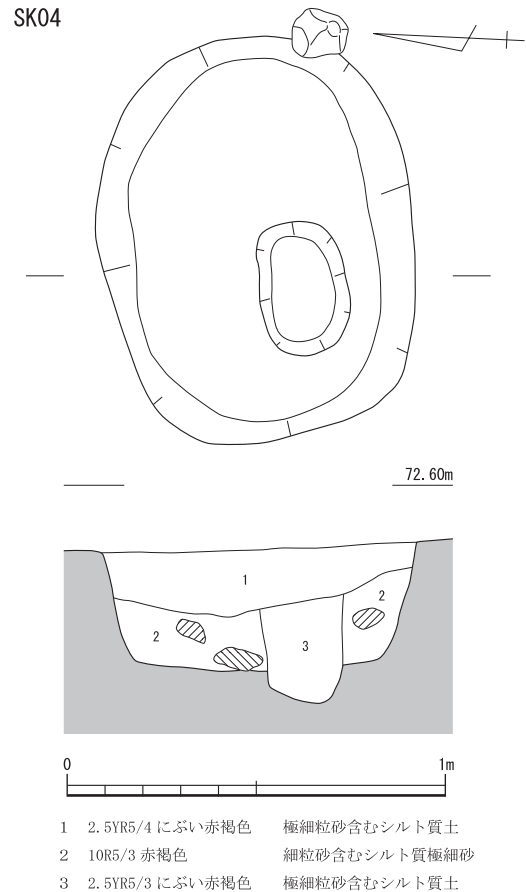
**埋没状況** 埋土は、にぶい赤褐色細粒砂・極細粒砂含むシルト質土の 1 層からなる。

**出土遺物** 埋土中および土坑底からは、遺物の出土は見られなかった。当遺構南側の遺構検出面直上からは、比較的まとまって須恵器・土師器が出土した。これらは遺構との位置関係より貼石墓 (SX01) ないしは SK03 に帰属する遺物であると考えられる。

**時期** 出土遺物が無いため確定できないものの、埋土の様相や周辺から出土する遺物の時期を考慮して、奈良時代後半 (8 世紀後半) であると判断される。



第 16 図 SK03



第 17 図 SK04

SK04

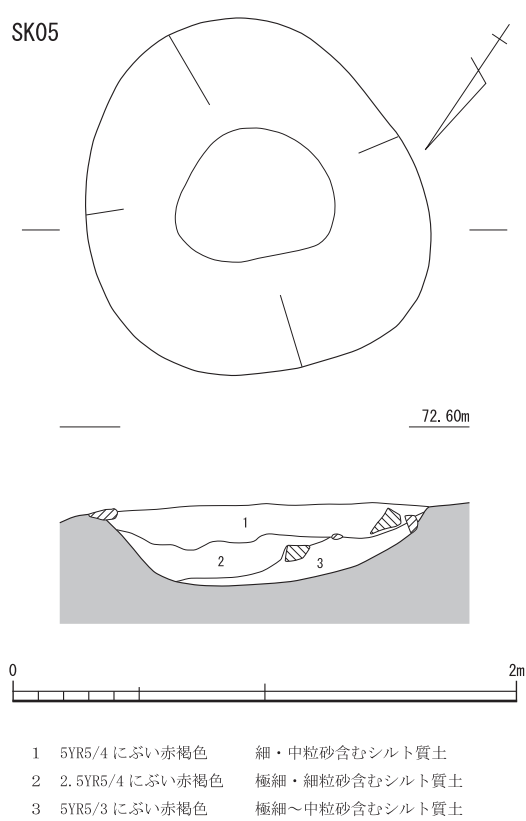
**検出状況** 調査区北側で検出した。貼石墓（SX01）の北側に位置する。遺構の立地は、丘陵頂上の平坦部北側に位置する。標高 72.45m 地点である。頂上の集石墓からの距離は 7 m、比高差は -0.65m である。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

**形状・規模** 検出面における平面形は、楕円形である。東西方向に主軸をもち、その規模は長軸方向で 1.60m、その直交方向で 0.83m を測る。横断面形は逆台形傾向である。検出面からの深さは、0.32m である。なお、土坑中央やや西寄りでは、第 1 層掘削後に長軸 0.35m、短軸 0.23m のピット状の落ち込みを検出した。このピット状の落ち込みの深さは検出面から 0.27m である。

**埋没状況** 埋土は 3 層からなる。1 層は他の遺構と同様に、にぶい赤褐色極細粒砂含むシルト質土であり、自然堆積であると考えられる。2 層は他の遺構とは異なる赤褐色シルト質極細粒砂土である。埋土中には  $\phi$  7 ~ 13 cm 大の亜円礫が混じっており、その層相から人為的な埋め土である可能性がある。3 層はにぶい赤褐色極細粒砂含むシルト質土であり、ピット状を呈する。1 層の埋土と類似する。以上のことから、当遺構は大型の柱穴である可能性が考慮される土坑であると判断でき、1・3 層は自然堆積、2 層は人為的な埋め土であると考えられる。

**出土遺物** 埋土中および土坑底からは、遺物の出土は見られなかったが、近接して土師器杯（9）と須恵器坏蓋（21）が出土した。

**時期** 出土遺物が無いため確定できないものの、埋土の様相や周辺から出土する遺物の時期を考慮して、奈良時代後半（8 世紀後半）であると判断される。



第 18 図 SK05

SK05

**検出状況** 調査区北東側で検出した。貼石墓 (SX01) の北東側、SK04 の南東側に位置する。遺構の立地は、丘陵頂上の平坦部北東側に位置する。標高 72.2m 地点である。頂上の集石墓からの距離は 7 m、比高差は -0.9m である。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

**形状・規模** 検出面における平面形は、楕円形気味の円形である。北西-南東方向に主軸をもち、その規模は長軸方向で 1.4m、その直交方向で 1.2m を測る。横断面形は碗形である。検出面からの深さは 0.21m である。

**埋没状況** 埋土は 3 層からなる。いずれも他の遺構と同様に赤褐色のシルト質土である。その層相から判断して、いずれも自然堆積であると考えられる。

**出土遺物** 埋土中および土坑底からは、遺物の出土は見られなかった。

**時期** 出土遺物が無いため確定できない。

### 3. 小穴

SP01

**検出状況** 調査区南側で検出した。貼石墓 (SX01) の南側、SK02 の北西側に位置する。遺構の立地は、丘陵山頂から南側に張り出す尾根筋の南西側斜面上に位置する。標高 71.7m 地点である。頂上の貼石墓からの距離は 11m、比高差は約 -1.60m である。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

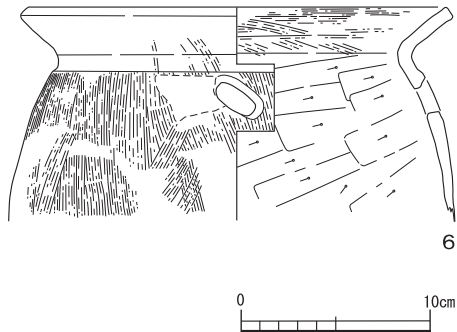
**形状・規模** 検出面における平面形は、不整楕円形である。ほぼ東西方向に主軸をもち、その規模は長軸方向で 0.56m、その直交方向で 0.32m を測る。横断面形は逆台形傾向である。検出面からの深さは、0.30m である。

**埋設土器** 埋土中からは土師器が出土した。破片の状態では出土しているが、破断面の状態から意図的は破砕ではないと判断できる。この土師器の直下からは根石が出土している。根石は平な安定面を上にして底面に対して正位置に置かれており、現位置を保っている。以上の観察から、ピット中に根石を据え置き、その上に土師器を置いた土器埋設ピットであると考えられる。

**埋没状況** 埋土は、3 層からなる。1・2 層は当調査で一般的にぶい赤褐色のシルト質土である。その層相から自然堆積であると考えられる。また 3 層は炭化物を微量に含む赤褐色のシルト質土であり、土中に包含する軟岩質風化礫は細かく破碎され、しまりは悪い。またこの 3 層はほぼ水平に堆積しており、その直上に根石が置かれている。よって、根石を設置するための人為的な埋土であると判断される。

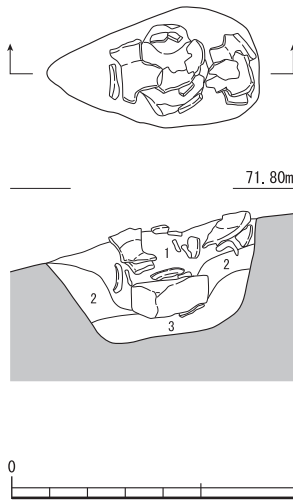
**出土遺物** 根石の上から 6 が出土した。

**時期** 奈良時代後半 (8 世紀後半) であると判断される。



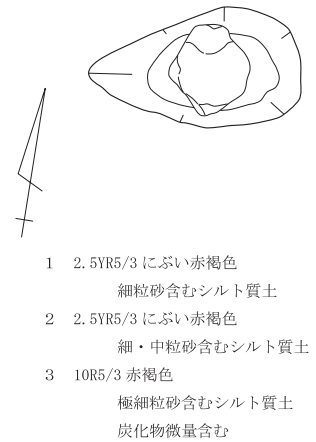
第19図 SP01 出土の土器

SP01  
埋設土器出土状況



第20図 SP01

土器除去後根石出土状況



SP02

**検出状況** 調査区南側の平坦面 B で検出した。遺構の立地は、北西から南東方向へ延びる舌状の尾根線上に位置する。標高 71.60m 地点である。頂上の貼石墓からの距離は 18m、比高差は -1.5m である。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

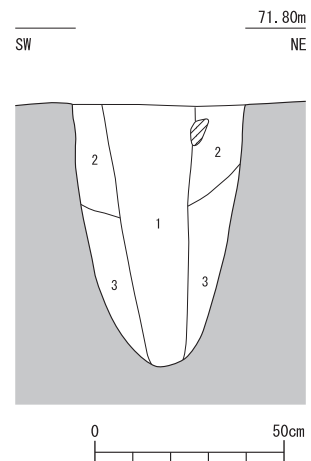
**形状・規模** 検出面における平面形は、円形である。ほぼ正円形であり、その規模は長軸方向で 0.5m、その直交方向で 0.45m を測る。横断面形は U 字形である。検出面からの深さは、0.7m である。

**埋没状況** 埋土は、柱痕 1 層 (1) と掘方埋土 2 層 (2・3) からなる。2・3 層は、ともに基盤層であるにぶい赤褐色のシルト質土であるが、土中に包含する軟岩質風化礫は細かく破碎され、しまりは悪い。また炭化物が少量混じる。以上のことから、当遺構の掘方埋土は人為的な埋土であると判断できる。

**出土遺物** 埋土中からは、遺物の出土は見られなかった。

**時期** 出土遺物が無いため確定できない。

SP02



- 1 2.5YR5/3 にぶい赤褐色  
極細・細粒砂含むシルト質土
- 2 2.5YR5/4 にぶい赤褐色  
極細粒砂含むシルト質土
- 3 10R5/4 赤褐色  
極細・細粒砂含むシルト質土

第21図 SP02

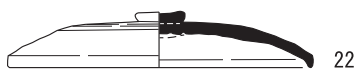
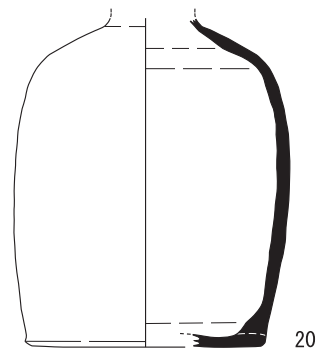
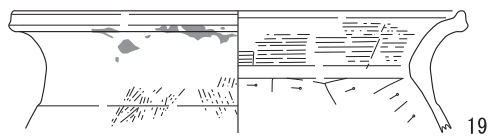
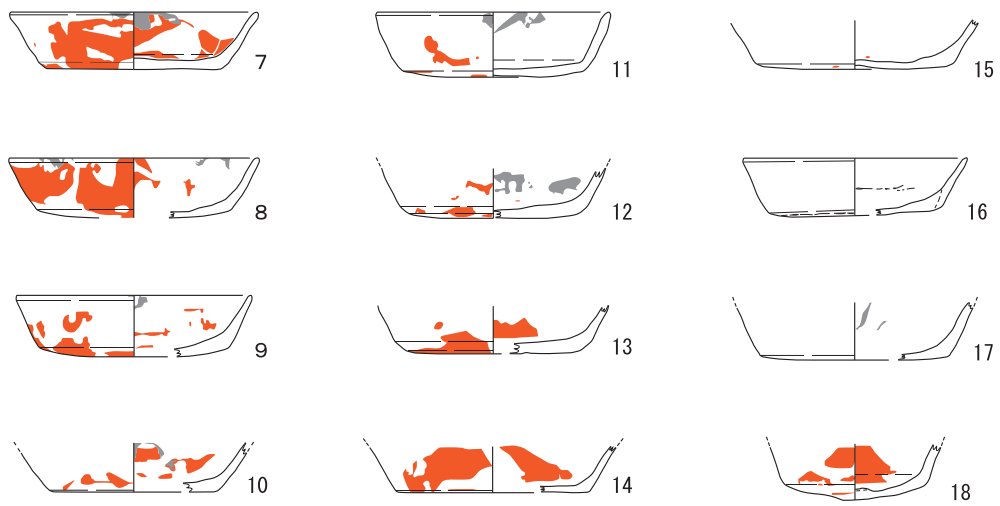
4. 出土遺物

本節では貼石墓 (SX01) を除く遺構と、遺構検出面直上から出土した遺物について報告する。遺物は須恵器・土師器・石製品・鉄製品が出土した。

(1) 土器

6~19 は土師器である。20~30 は須恵器である。6 のみ遺構内 (SP01) から出土したもので、それ以外は全て遺構検出面直上からの出土である。

6 は土師器の甕 A である。口縁部外面は縦方向のハケ目をナデ消し、胴部上半は縦方向のハケを施す。口縁部内面は横~斜め方向のハケ目、胴部上半内面は横方向のヘラケズリを施す。口縁

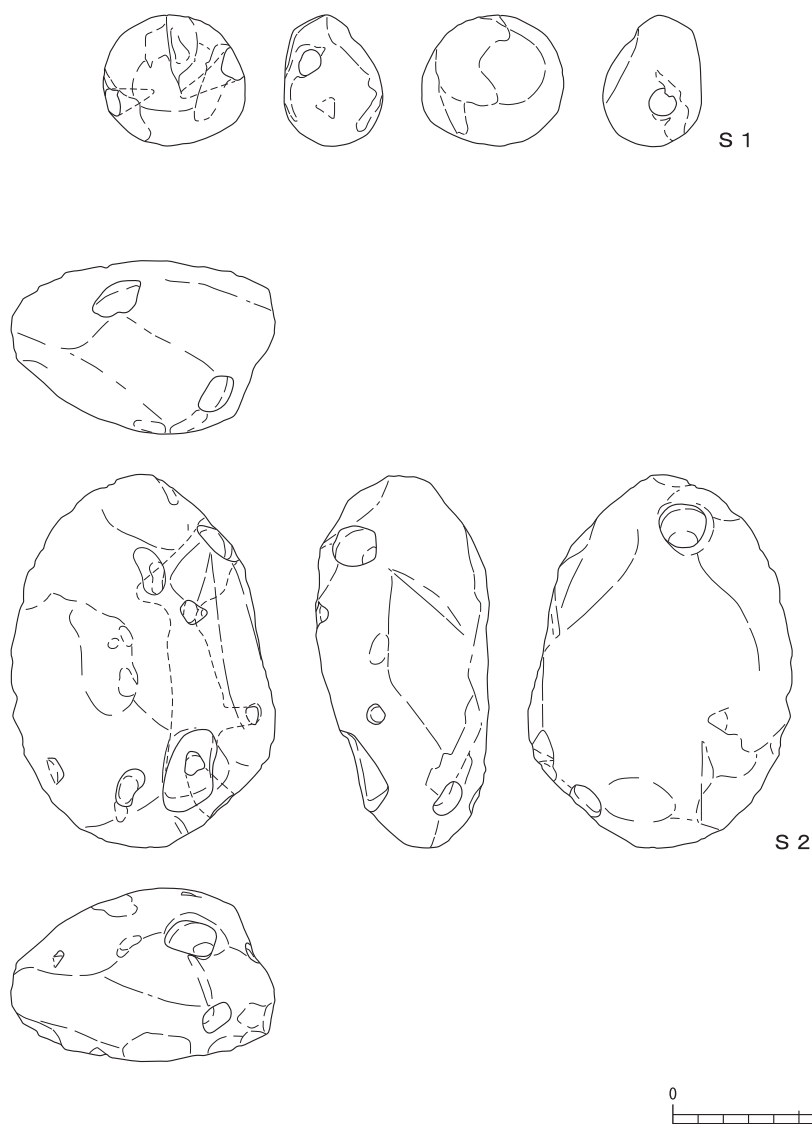


第 22 図 遺構検出面直上出土の土器



端部は横方向のナデによって面が形成される。頸部直下では、長軸 2.9 cm、短軸 1.5 cmの楕円形の焼成後穿孔が1箇所見られる。7は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部は回転糸切りによって切り離されている。内外面口縁部付近にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。8は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内外面口縁部付近にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。9は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。器表は摩滅している。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内外面口縁部付近にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。10は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。器表は摩滅している。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内面口縁部付近にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。11は杯Aである。外面には赤彩が施されている。器表は摩滅している。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内外面口縁部付近にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。12は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。外面の体部-底部界は強いユビナデによって稜がつけられている。内面にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。13は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。器表は摩滅している。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。外面の体部-底部界は強いユビナデによって稜がつけられている。14は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。15は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。器表は摩滅が著しい。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。16は杯Aである。器表は摩滅している。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。17は杯Aである。体部内外面はユビナデによって成形されており、底部は回転ヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内面口縁部付近には灯心状のススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。18は杯Aである。内外面ともに赤彩が施されている。体部内外面はユビナデによって成形されている。底部はヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内面見込みには粘土の貼り足しが見られ、底部には粘土を貼り足した際のユビオサエが見られる。底部は丸底気味の平底であり、口縁部への立ち上がりの強さを踏まえると、碗Cである可能性も考えられる。19は甕である。口縁部外面は横方向のナデ、頸部から胴部にかけては縦方向のハケを施す。口縁部内面は横方向のハケを、胴部は横方向のヘラケズリを施す。口縁部短く外反する。口縁端部は上方へつまみ上げるようにして肥厚する。口縁部外面には部分的にススが付着している。

20は須恵器の壺である。平底で卵形の体部であることから、壺Nと分類できるが、肩部には耳状の把手は取り付かない。頸部より上は欠損する。頸部から体部上半（肩部付近）は回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリのちナデによって成形されている。ただしヘラケズリの範囲は明瞭ではない。内面は回転ナデによって成形されている。底部は回転ヘラ切りによって切り離されたのちナデによる成形が見られ



第 23 図 遺構検出面直上出土の石製品

る。底面には、わずかにススが付着している。21 は杯 B 蓋である。天井頂部には宝珠形のつまみを取り付く。天井部外面上半は回転ヘラケズリを施し、下半は回転ナデによって成形されている。内面は回転ナデによって成形されている。22 は杯 B 蓋である。天井部には扁平なつまみを取り付く。天井部外面は、上半は回転ヘラケズリを施し、下半から口縁部付近は回転ナデによって成形されている。内面は回転ナデによる成形である。口縁端部の屈曲は明瞭である。23 は杯 B 蓋である。天井部には扁平なつまみを取り付く。天井部外面は、上半は回転ヘラケズリを施し、下半から口縁部付近は回転ナデによって成形されている。内面は回転ナデによる成形である。24 は杯 B 蓋である。天井頂部にはつまみを取り付いていたと考えられるが、欠損している。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、口縁部付近は回転ナデによって成形されている。内面は回転ナデによる成形である。25 は杯 B 蓋である。天井部上半は欠損しており、つまみの有無は不明である。残存する天井部は回転ヘラケズリを施しており、口縁部は回転ナデによる成形である。口縁端部の屈曲は明瞭である。26 は杯 A である。体部内外面は回転ナデによって成形されており、底部は回転ヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。内外面口縁部付近にはススが付着しており、灯明皿としての利用が想定される。27 は杯 A である。体部内外面は回転ナ

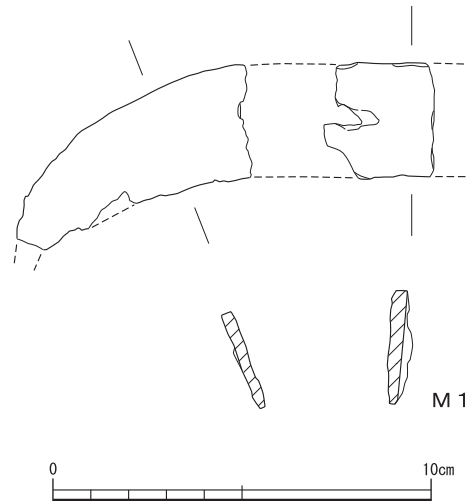
デによって成形されており、底部は回転ヘラ切りによって切り離されている。28は杯Aである。体部内外面は回転ナデによって成形されており、底部は回転ヘラ切りによって切り離されている。体部から底部にかけて外面に緩やかな屈曲が見られ、平高台が作られている。29は皿Aである。体部（口縁部）内外面は回転ナデによって成形されており、底部は回転ヘラ切りによって切り離され、その後ナデによる成形が見られる。30は杯Bである。底部のみ残存する。底部は回転ヘラ切りによって切り離されたのち、高台を貼り付けている。高台はやや退化傾向である。見込み部は回転ナデによって成形されている。

(2) 石製品

S 1・S 2ともに複数の穿孔をもつ不明石製品である。S 1は最大長 5.2 cm、最大幅 5.7 cmの楕円形である。円磨度の高い亜円礫を使用しており、2箇所穿孔が施されている。穿孔はいずれもφ1.2 cm前後であり、2孔は貫通しておらず途中で止まっている。後述するS 2は貫通していることから、本来は貫通を目的としている可能性が高い。S 2は最大長14.7cm、最大幅10.4cmの楕円形である。円磨度の高い亜円礫を使用しており、6箇所穿孔が施されている。穿孔は、φ1.7cmのものが3箇所、φ1.2cmのものが1箇所、φ0.7cmのものが2箇所である。これらのうち、4箇所の穿孔が貫通しており、φ1.7cmの2孔が貫通した側縁からφ1.2cmとφ0.7cmが1孔ずつ貫通している。詳細な用途は不明であるものの、この孔に紐などを通していた可能性も考えられる。

(3) 鉄製品

M 1は曲刃鎌である。柄部（基部）は欠損する。刃部は内刃である。刃部先端付近は剥落が著しい。



第24図 遺構検出面直上出土の鉄製品

第1表 石製品・鉄製品観察表

石製品

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm, g)			残存	備考	図版番号	写真図版
				最大長	最大幅	重量				
根石	SP01	石製品	不明石製品	20.30	17.60	4600.00	—	搬入礫	—	17
S 1	確認調査時貼石墓 (SX01) 周辺	石製品	不明石製品	5.20	5.70	82.50	完形	穿孔2箇所、貫通せず	第23図	17・18
S 2	検出面直上	石製品	不明石製品	14.70	10.40	747.10	完形	穿孔6箇所、うち4箇所貫通	第23図	18

鉄製品

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			残存	備考	図版番号	写真図版
				最大長	最大幅	最大厚				
M 1	検出面直上	鉄製品	曲刃鎌	(11.00)	(3.00)	0.40~0.60	刃先1/2	刃先剥落	第24図	18

## 第4章 総括

### 第1節 貼石墓（SX01）の構築復元

広峰遺跡で検出した遺構の中心となる貼石墓（SX01）は、貼石墓と呼称したように、墳丘の高まりに貼石状に石が積まれている墳墓である。ただし、石を用いた墳墓の代表格と言える古墳のように、葺石状であるわけでもなく、やや粗雑な配列であると言える。本報告では貼石墓と呼称しているが、集石墓などと名称することも可能であり、類例調査を含めた今後の課題と言える。

貼石墓は第3章第2節で述べたように、2ヶ所の平坦面（平坦面A・B）のうち、平坦面Aに作られている。墳丘は地山削り出しであり、盛土構築ではないため、詳細な構築復元とまではいかないものの、その構造を簡潔に下記に示す。

- ①山塊から張り出した舌状の尾根の頂部のうち、2ヶ所を平坦に削り出す（平坦面A・B）。これら平坦面は平面形を整えはせず、丘陵の旧地形を反映したかたちとなる。
- ②平坦面Aを削り出す最中、その中央付近に6.3m×4.9mの長方形のマウンドを削り残し、墳丘とする。墳丘の高さは検出高さでは40cmであるが、盗掘を受けており陥没していたため、本来の高さは70～80cm程度まで復元できる。
- ③墳丘頂部に埋葬施設を掘り込み、石を墳丘全面に貼り（葺き）、完成させる。

被葬者の埋葬時期など、不明確な点が多いものの、概ね構築手順は以上のとおりであろう。

また、貼石内に見られた四隅立石は、埋葬施設掘削の際の目印として、先行して据えられた可能性も考えられる。そして平坦面Bは遺構がSP02を除いて皆無であり、その機能は想定し難い。想像を逞しくすると、当地は南（南東）に拓ける地形であり、この平坦面を墳墓の入口として、利用していた可能性も考えられ、SP02は目印としての旗や棒を挿していたと言えよう。

### 第2節 広峰遺跡から出土する灯明皿

今回の調査によって、須恵器・土師器の杯を用いた灯明皿（灯火器）がまとまって出土した点は注目できる。その割合は、今回報告した出土土器の約30%に及び、実数と比べたその割合の多さが見てとれよう。上述のように、今回出土した土器の大半は8世紀後半（奈良時代～平安時代）に帰属する。当該期における但馬国の動向としては、天平神護3年（767年）・神護景雲2年（768年）前後といわれる但馬国分寺の創建が挙げられる。また第2次但馬国府の移転（804年〔延暦23年〕）とも時期が近い。こうした歴史的背景の中で灯明皿をどのように位置付けていくかであるが、その一つに「聖武朝の国分寺、国分尼寺の造営にみられる全国的な鎮護国家の施策」（神野 2020）に伴う燃灯供養が該当しよう。これについては、既に但馬国府・国分寺の約1.0km南西に位置する南構遺跡を報告した山田清朝によって提示されている（山田 2023）。南構遺跡では、奈良時代～平安時代にかけての包含層より灯明皿が22点出土しており、その出土背景は国分寺近接地における燃灯供養の一環であると位置付けられている。広峰遺跡出土の灯明皿は、この南構遺跡から出土した灯明皿と概ね時期を同じくしており、なおかつ但馬国府・国分寺と遠くない距離であることから、同様に燃灯供養である可能性が高いと判断できる。ただし注意しなければいけない点は、当該期で燃灯供養に伴う灯明皿の出土は、南構遺跡を含めて集落等の空閑地に多いことに対して、広峰遺跡は貼石墓という墳墓周辺で行われていることである。そのため、燃灯供養の目的を、国分寺造営による鎮護国家の施策の一環として捉えず、純粋な仏教行事としての墓前

供養とみることも可能である。奈良県天理市の福ヶ谷遺跡では、葬送儀礼として燃灯供養をおこなっている点も注目すべき調査成果である（奈良県立橿原考古学研究所編 1996）。このように広峰遺跡の灯明皿についての出土背景は

①但馬国分寺造営にみられる鎮護国家の施策による燃灯供養

②貼石墓（SX01）の被葬者供養による葬送儀礼としての燃灯供養

といった2つの可能性が候補として挙げることができる。この灯明皿については、その他の土器の詳細を含めて検討が必要であり、今後の課題となるであろう。

### 第3節 総括

今回の調査の結果、奈良時代～平安時代（8世紀後半）頃の墳墓を中心とした遺構を検出した。この墳墓は石を携える形態であり、当該期においては極めて珍しい。ただし、周辺遺跡を見ると豊岡市に所在する市場神無遺跡群において7世紀後半代の集石墓が複数基確認されており（潮崎 2011）、今後それとの比較が必要となるであろう。また、注目すべき遺構としてSK01が挙げられる。SK01は被熱粘土壁が見られる土坑であり、その様相や貼石墓との位置関係から、火葬場としての用途を想定できる。

また、広峰遺跡の周辺立地環境を見ると造墓にあたる思想が読み取れる（註1）。貼石墓（SX01）は北西側の山塊から、短く舌状に派生する丘陵（尾根）上に立地しており、遺跡より南側は傾斜の急な斜面となっている。この北西部の山塊は、貼石墓が作られた丘陵を取り囲むように左右で舌状の丘陵を緩やかに南へ延ばしており、貼石墓のある丘陵はこの両側の丘陵に護られるかのように位置している。また南東方向には平野部が開けており、南側には丘陵や山塊がなく、開放されている。これらの自然な立地は、風水思想にとっての好立地であり、終末期古墳や律令制以降の古墓に用いられる立地と一致する。風水思想による墳墓の地形選択について検討した来村多加史氏によれば、「谷奥突出型」に分類され（来村多 2004）、奈良県高取町の与楽鐘子塚古墳や、明日香村の天武・持統天皇陵、小山田遺跡などが例として挙げられる。

広峰遺跡の周辺における但馬国府や但馬国分寺などの官営施設、さらに周辺部の深田・カナゲ田遺跡、上石遺跡といった斎串や墨書土器が出土する遺跡の様相、また風水思想による選地や、火葬遺構（SK01）といった中央（平城京）で採用されている律令的な葬法を登用していることから、貼石墓に埋葬された被葬者は郡司クラスなどが想定することができ、有力な人物の奥津城であった可能性が考えられる。また、灯明皿の出土傾向から捉えられる燃灯供養の様相もこの被葬者を明らかにする鍵となるであろう。本報告を事実報告資料として、今後のより詳細な検討に期待したい。

註1）周辺立地環境や造墓思想については、大阪大谷大学教授の狭川真一氏より多くのご教示を得た。

来村多加史 2004『風水と天皇陵』講談社

潮崎 誠 2011「市場神無遺跡群の調査成果」『但馬史研究』第34号 但馬史研究会

神野 恵 2020「古代都城の灯火器—灯火痕観察のススメ—」『灯明皿と官衙・集落・寺院』第23回古代官衙・集落研究会報告書 奈良文化財研究所

奈良県立橿原考古学研究所編 1996『福ヶ谷遺跡・白川火葬墓群発掘調査報告書』

山田清朝編 2023「南構遺跡と周辺の遺跡」『南構遺跡・南構古墳群』第二分冊 兵庫県教育委員会

第2表 土器観察表

報告 番号	出土遺構	種別	器種	法量			残存	色調	胎土
				口径	器高	底径			
1	貼石墓 (SX01) 南西側	須恵器	短頸壺	(11.00)	(14.00)	(24.20)	口縁部若干 体部上半1/4	灰	砂粒・雲母・ チャート少量
2	貼石墓 (SX01) 南西側	須恵器	杯	(13.40)	3.60	(9.70)	口縁部若干 体部～底部1/2	灰	チャート・石英中量
3	貼石墓 (SX01) 南西側	須恵器	杯	(10.90)	(3.75)	(7.00)	口縁部1/3 体部1/3、底部若干	黄灰～灰	チャート中量
4	貼石墓 (SX01) 南西側	土師器	杯	—	(3.00)	(9.90)	体部～底部1/3	明赤褐～ にぶい橙	砂粒少量
5	貼石墓 (SX01) 南西側	土師器	杯	—	(2.15)	(5.80)	体部若干 底部1/2弱	にぶい黄橙 ～明赤褐	砂粒・チャート少量
6	SP01埋土	土師器	甕	22.10	(11.30)	—	口縁部7/8強 体部若干	明赤褐	砂粒・雲母多い 長石・チャート少量
7	検出面直上	土師器	杯	(12.95)	3.00	9.20	口縁部若干 体部～底部ほぼ完存	橙	砂粒少量
8	検出面直上 SK02付近	土師器	杯	(13.15)	(3.15)	(10.30)	口縁部1/5 体部～底部1/4	にぶい黄橙 ～橙	砂粒少量
9	検出面直上 SK04近接	土師器	杯	(12.30)	(3.25)	(10.00)	口縁部若干 体部～底部1/3	にぶい黄橙 ～明赤褐	石英少量
10	検出面直上	土師器	杯	—	(2.60)	(9.00)	体部1/4 底部1/2弱	橙	チャート他少量
11	検出面直上	土師器	杯	(12.20)	(3.45)	(9.50)	口縁部1/4 体部～底部1/2弱	にぶい橙～ にぶい黄褐	砂粒少量
12	検出面直上 SK01付近	土師器	杯	—	(2.65)	(9.00)	体部1/4弱 底部1/2	橙	砂粒中量
13	検出面直上	土師器	杯	—	(2.50)	(9.20)	体部若干 底部1/4	にぶい橙	砂粒・雲母・ チャート少量
14	検出面直上	土師器	杯	—	(2.45)	(10.30)	体部若干 底部1/8	にぶい黄橙 ～明赤褐	砂粒少量
15	検出面直上	土師器	杯	—	(2.60)	(10.40)	体部若干 底部1/2	明黄褐 ～橙	チャート中量
16	検出面直上	土師器	杯	11.75	3.10	9.15	口縁部1/2 体部～底部1/2	明黄褐～橙	砂粒中量
17	検出面直上	土師器	杯	—	(3.05)	(10.00)	体部～底部1/4弱	明褐～褐	砂粒・雲母中量
18	検出面直上 貼石墓の南西側斜面	土師器	杯	—	(2.95)	(7.40)	体部若干 底部1/8	にぶい黄橙 ～赤褐	砂粒少量
19	検出面直上 東側斜面	土師器	甕	(23.60)	(6.45)	—	口縁部1/4弱 頸部1/4弱	明赤褐～ 赤褐	チャート・長石多量
20	検出面直上	須恵器	壺	—	(17.35)	12.70	体部3/8 底部3/4	灰白～灰	砂粒・チャート少量
21	検出面直上 SK04近接	須恵器	杯蓋	—	(2.30)	—	ツマミ完存 天井部1/4弱	灰白	砂粒ごく少量
22	検出面直上 尾根筋	須恵器	杯蓋	15.90	2.90	—	ツマミ完存 天井部3/4 口縁部1/2	灰白	砂粒少量
23	検出面直上 尾根筋西側	須恵器	杯蓋	—	(2.10)	—	ツマミ完存 天井部1/4	灰白～黄灰	砂粒・チャート少量
24	検出面直上	須恵器	杯蓋	(15.80)	(2.30)	—	天井部3/8 口縁部1/3	灰	石英・長石・砂粒少量
25	検出面直上 貼石墓の南側尾根筋	須恵器	杯蓋	(15.80)	(2.05)	—	天井部若干 口縁部1/8	灰白～灰	砂粒少量
26	検出面直上 東側斜面	須恵器	杯	(12.00)	(3.50)	(9.10)	口縁部1/4 体部若干	灰	砂粒・長石少量
27	検出面直上 貼石墓の南西側斜面	須恵器	杯	(12.00)	(2.80)	(10.00)	口縁部若干 体部～底部1/3	灰白	砂粒少量
28	検出面直上 貼石墓の南西側斜面	須恵器	杯	(12.60)	(3.65)	(8.00)	口縁部1/4 体部～底部1/3	灰	砂粒・石英・ チャート中量
29	検出面直上	須恵器	皿	(13.80)	2.10	(11.50)	口縁部1/5 体部～底部若干	灰白	砂粒少量
30	検出面直上 貼石墓北東部斜面	須恵器	杯	—	(1.85)	6.65	底部ほぼ完存	灰白	チャート中量

第2表 土器観察表

報告番号	調整	赤彩	備考	図版番号	写真図版
1	外面：口縁部～胴部回転ナデ 内面：回転ナデ	—	胴部に2条1組の沈線が2箇所施文 口縁部～胴部上半に自然釉	第13図	14
2	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ 内面：回転ナデ	—		第13図	14
3	外面：口縁部～体部回転ナデ 内面：回転ナデ	—		第13図	14
4	外面：体部ユビナデ、底部調整不明（回転ヘラ切りか） 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	器表摩滅著しい	第13図	14
5	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちナデ 内面：ユビナデ	—		第13図	14
6	外面：口縁部横のナデ、口縁～頸部ハケ目のちナデ、胴部縦のハケ目 内面：口縁～頸部の横から斜めのハケ目、胴部横のヘラケズリ	—	胴部焼成後穿孔1箇所	第19図	14
7	外面：体部ユビナデ（回転ナデ）、底部回転糸切り 内面：ユビナデ（回転ナデ）	外面：○ 内面：○	内外面口縁部にスス附着 （灯明皿）	第22図	14
8	外面：口縁部～体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	内外面口縁部にスス附着 （灯明皿）	第22図	14
9	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	内外面口縁部にスス附着 （灯明皿）	第22図	15
10	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	内面口縁付近にスス附着 （灯明皿）	第22図	15
11	外面：口縁部～体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：—	内外面口縁部にスス附着 （灯明皿）	第22図	15
12	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	内面にスス附着 （灯明皿）	第22図	15
13	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	器表摩滅著しい	第22図	15
14	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○		第22図	15
15	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	器表摩滅著しい	第22図	15
16	外面：口縁部～体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	—	器表摩滅著しい	第22図	15
17	外面：体部ユビナデ（回転ナデ）、底部ヘラ切りのちナデ 内面：ユビナデ（回転ナデ）	—	内面口縁付近にスス附着 （灯明皿）	第22図	15
18	外面：体部ユビナデ、底部ヘラ切りのちユビナデ 内面：ユビナデ	外面：○ 内面：○	内面見込みに粘土充填	第22図	16
19	外面：口縁部横のナデ、頸部～胴部縦のハケ目 内面：口縁部横のハケ目、胴部ヘラケズリ	—	外面口縁部にスス附着	第22図	16
20	外面：体部上半回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリのちナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ 内面：回転ナデ	—	底部にスス附着	第22図	16
21	外面：天井部回転ヘラケズリ・回転ナデ 内面：回転ナデ	—	宝珠ツマミ	第22図	17
22	外面：天井部回転ヘラケズリ、天井部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	—	扁平ツマミ 炭化有機物痕わずかに附着	第22図	16
23	外面：天井部回転ヘラケズリ・回転ナデ 内面：回転ナデ	—	扁平ツマミ	第22図	17
24	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	—		第22図	16
25	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	—		第22図	17
26	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ 内面：回転ナデ	—	内外面口縁部にスス附着 （灯明皿）	第22図	16
27	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	—	底部にヘラ切り時のバリ残る 炭化有機物痕わずかに附着	第22図	16
28	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	—		第22図	16
29	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ 内面：回転ナデ	—		第22図	16
30	外面：底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	—	底部高台	第22図	17





# 写真図版





調査前遠景（西から）



調査前遠景（北から）



調査前遠景（北西から）



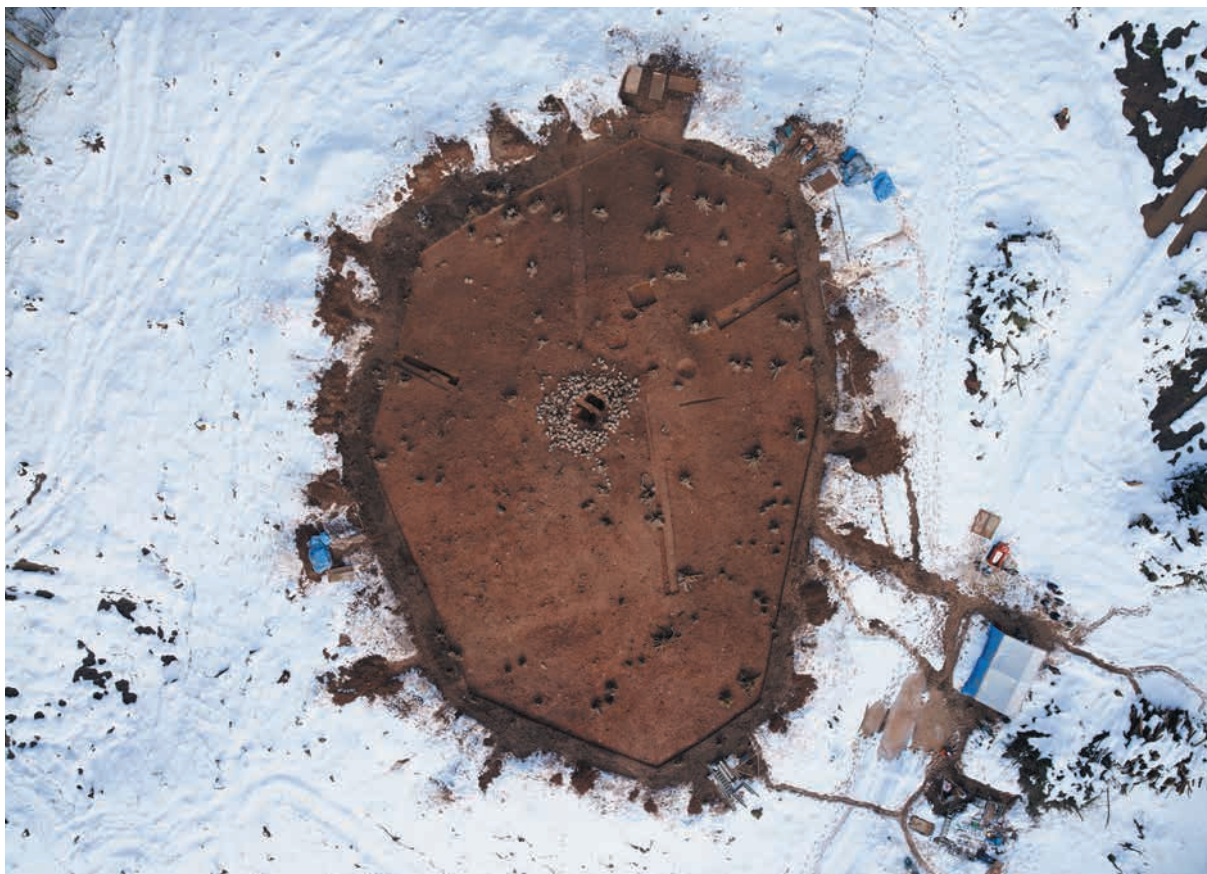
調査後遠景（北西から）



調査後遠景（南から）



調査後遠景（南西から）



調査区垂直写真（上が北）



貼石墓（SX01）垂直写真



調査前状況（北から）



調査前状況（北東から）



貼石墓周辺（SX01）  
の調査前状況（南から）



貼石墓 (SX01) 検出風景 (南から)



貼石墓 (SX01) 検出状況遠景 (転落石あり) 南から





貼石墓 (SX01) 検出状況近景 (転落石あり) 南から



貼石墓 (SX01) 検出状況 (転落石あり) 東から



貼石墓 (SX01) 全景 (南から)



貼石墓 (SX01) 全景 (東から)



貼石墓 (SX01) 全景 (西から)



貼石墓 (SX01) 石敷設状況1 (南から)



貼石墓 (SX01) 石敷設状況2 (南西から)



貼石墓 (SX01) 石敷設状況3 (北西から)



貼石墓 (SX01) 石敷設状況4 (南から)



貼石墓 (SX01) 四隅立石検出状況 (南東から)



四隅立石 (北西から)



四隅立石 (北東から)



四隅立石 (南西から)



四隅立石 (南東から)



貼石墓 (SX01) 埋葬施設落ち込み (西から)



貼石墓 (SX01) 埋葬施設横断面 (南から)



SK01 検出状況（南から）



SK01 壁体被熱部（東から）



SK01 横断面（南から）



SK02 横断面 (北西から)



SK03 横断面 (北西から)



SK04 横断面 (西から)



SK05 横断面 (北西から)



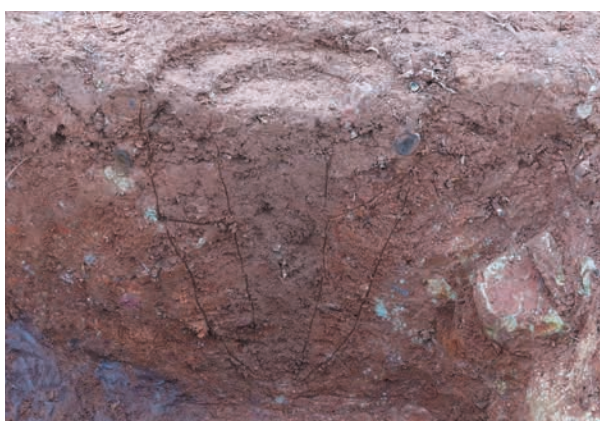
SP01 土器出土状況 (南から)



SP01 根石出土状況 (南から)



SP01 横断面 (南から)



SP02 横断面 (南東から)

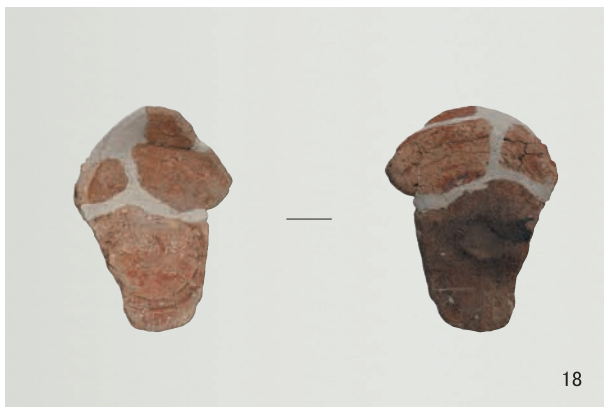


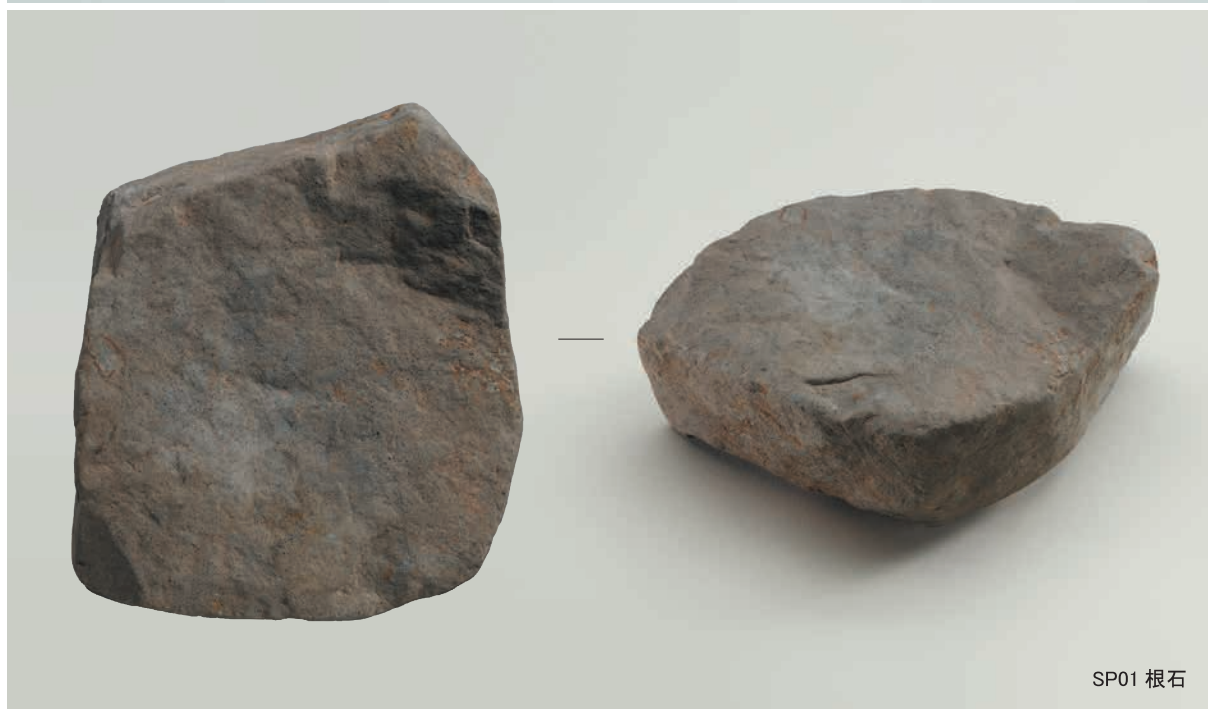
出土土器1





出土土器2





出土土器4・石製品1



出土石製品2・鉄製品

# 報告書抄録

ふりがな	ひろみねいせき							
書名	広峰遺跡							
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第531冊							
編著者名	園原悠斗・大嶋昭海							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 <small>ひょうごけんかこくんはりまちようおおなか ちょうめ ばん ごう ひょうごけんりつこうこほくぶつかんない</small> 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内) TEL079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 <small>ひょうごけん こうべしちゅうおうくしもやまでどおり ちょうめ ばん ごう</small> 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078-362-3784							
発行年月日	令和6(2024)年3月8日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 <small>ひょうごけんかこくんはりまちようおおなか ちょうめ ばん ごう</small> 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひろみねいせき 広峰遺跡	とよおかしかみさの 豊岡市上佐野	28209	102158	35° 30' 42.31"	134° 48' 7.94"	20201109~20210108 (2020005)	986㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
広峰遺跡	墓	奈良時代 ~平安時代	貼石墓(集石墓)、 土坑、土器埋設ピット、柱穴		灯明皿、須恵器、土師器、石製品、鉄鎌			
要約	<p>円山川左岸の丘陵部尾根上に検出された墳丘墓を調査した。調査の結果、墳丘に貼石状に石が積まれた貼石墓1基検出され、その周囲を取り囲むように土坑5基と小穴3基を検出した。出土遺物から遺構はいずれも奈良時代~平安時代(8世紀後半)に構築されたと考えられ、相互に有機的な連性をもつ一連の遺構と考えられる。特に壁面を粘土で被覆し、被熱を帯びたSK01は貼石墓との関係性から火葬との関係が考えられる。</p> <p>出土遺物は、灯明皿、須恵器、土師器、石製品、鉄製品が出土している。特に灯明皿は出土遺物の30%を占め、上記遺構の構築および使用に伴う儀礼に用いた可能性が高い。</p>							

---

兵庫県文化財調査報告 第531冊

豊岡市

## 広 峰 遺 跡

— 一般国道483号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和6（2024）年 3月 8日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号  
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会  
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：有限会社東光舎  
〒675-0965 兵庫県姫路市東延末4丁目81番地

---



